

ISBN4-00-004866-X C0322 P2575E
定価 2575 円(本体 2500 円)



スバルト

オランダの植民地支配に日本の占領を経て一九四五年に独立したインドネシアでは、親米政権スカルノ(一九〇一―七〇)のあとスハルト(一九二一―)の時代が六八年以来なお続いている。スカルノの指導民主主義スハルトの新憲法体制とは何か。九六年夏の反政府暴動は何を告げるのか。この生涯を通じてこの国の現代史と政治構造を考える。

白石隆 著

偉大なる
インドネシアをめざして

スカルノとスハルト

白石隆 著

現代アジアの肖像

現代アジアの肖像

大阪府立図書館



1113272700

人文

220

66N

11



大阪府立図書館



1113272700

岩波書店

刊行にあたって	
はじめに	
インドネシア地図	
第一章 夜明けの子	1
1 生い立ち	3
2 スラバヤ時代	7
3 バンドウン時代	12
4 インドネシア国民党	21
5 逮捕と流刑	33
第二章 占領、革命、独立	41
1 日本軍占領時代	43
2 革命	53
3 独立	61
第三章 革命のロマンティズム	79
1 親父の肖像	81
2 指導民主主義	83
3 革命のロマンティズム	91
4 破局への途	98
第四章 成り上がり	107
1 生い立ち	109
2 伍長、軍曹、小隊長、中隊長、中佐	112
3 デイポヌゴロ時代	118
4 ジャカルタ時代	124
5 クーデタ	128
第五章 安定と開発の政治	135
1 新秩序の二重性	137
2 国民的合意と国際的合意	140
3 安定の政治	143

4	開発の政治	155
5	大統領と親父	163
第六章 家族と国家		167
1	たそがれの時代	168
2	スハルトの変貌	172
3	安定の政治	178
4	開発の政治	185
5	スカルノを知らない子供たち	189

おわりに
 文献解題と注釈
 略年表

カバト写真提供 = P A N A
 本文写真提供 = K O M P A S
 T e m p o

Cornell University Southeast Asia Program Publications

装幀 = 戸田ソトム + 岡孝治



スカルノの指導民主主義体制は、一九五九年七月五日、一九四五年憲法にもとづいて設立された。憲法がスカルノに大統領としての権威を付与するのではなく、スカルノが憲法に正統性を付与する、これが大統領令による一九四五年憲法復帰の趣旨であった。

同日、スカルノは、ジュアング・カルタウイジャ首相を筆頭に、上級大臣九名、大臣二四名からなる新内閣を任命した。ついで一九五九年末、戒厳司令部を改組して最高戦争司令部を設立、最高司令官スカルノがジュアング首相、ナスティオン(陸軍参謀長)の補佐を受けて地域戒厳令執行官、陸軍地域軍管区司令官を直接指揮する体制が作られた。その翌年、一九六〇年には、一九五五年選挙で選出された国民議会が解散され、政党代表二三〇名、「機能」代表一五三名、合計二八三名からなるゴトン・ロヨン(助け合い)内閣が任命された。そして最後に一九六一年末、西イリアン解放最高作戦司令部が司令官スカルノ、副司令官ナスティオン、参謀長アフマッド・ヤニの下に設立された。これが指導民主主義体制の制度的枠組みを構成した。つまり、指導民主主義体制の中心には、あくまでスカルノがいた。

では、この体制は実のところどのような体制であり、スカルノはこれにどのような意味を与え、何をやろうとしていたのか。

1 親父の肖像

スカルノには二つの顔があった。一つは「終身大統領」「革命の偉大なる指導者」「人民の代弁者」という舞台の上の顔であり、もう一つは親父(パパ)の顔、ジャカルタのエリート政治におけるスカルノであった。舞台の上のスカルノ、人民の代弁者スカルノの意味についてはあとで検討する。ここではまず、スカルノの親父の顔を見ることから指導民主主義体制の分析をはじめよう。

さて、ハワード・ジョーンズは米国大使として例外的にスカルノとうまくいった人物であるが、その回想録に一九六〇年頃のスカルノ「宮廷」の様子がよく描写されている。彼によると、スカルノは毎朝五時半に起き、夜明けの祈りで一日が始まる。七時頃、朝のコーヒーの席に友人、閣僚、その他、さまざまな人たちが集まってくる。大使、映画スター、デパートの経営者、軍人、警察官、高速道路技師、政治家、建築家、芸術家、労働組合指導者、革命時代からの友人、海外からの訪問客、学生、大学教授、哲学者、宗教指導者、科学者。スカルノはスポーツシャツにスラックス、サンダル履きのリラックスした装いで、コーヒーを飲みながら一タースくらい新聞に目を通し、母親が赤ん坊を抱いてやってきて名前を付けてくれと頼むと名前を付けてやり、三〇センチも積まれた書類に目を通しては署名し、その間に陳情を聞いてひとつひとつ処理していく。宮殿の庭にはスタッフの子供のために幼稚園があり、八時頃、子供たちの声が聞こえるようになると、この席もお開きとなる。



朝のコヒーの席のスクアルノ(右, 1960年代)

これが親父スクアルノの描写である。みんなスクアルノのところにやって来る。もちろん何か用事があるからである。他のだれに頼んでもうまく行かないこともスクアルノならなんとかできるかもしれない、そう思うからスクアルノと一分でも話ができればと思つて、やって来る。あるいは自分で会えなければ、スクアルノに会える人に頼めばなんとかなるのではと思つて、そういう人に頼む。

こうして、関係である、友人である、政党の指導者である、軍人である、そういうさまざまな理由で、スクアルノに定期的に会える、必要ならいつでも会える、大統領官邸に出入りできる、そういう人々が、まるでスクアルノを中心として磁場でも構成するように、ジャカルタのエリート政治のサークルを形成した。そこにはナスティオン、アイデイトのように陸軍、共産党といった独自の権力基盤をもった人物もいれば、そうした独自の権力基盤はもたなくとも陰謀と権謀術教で他人を押し退け、スクアルノに取り

入ったスバンドリオ外相・中央情報庁真昼のような人物もいた。指導民主主義時代、この小さなサークルがインドネシアの政界を構成し、そこでおこることがうわざとなつて外に流れ、また集会、デモ、その他、外でおこったことが政界内部の権力関係に作用した。スクアルノはその中心にあり、大統領官邸の

朝のコヒーの席のように、政界を主宰していた。

2 指導民主主義

では、指導民主主義はどのような構造を持っていたのか。これを考える上でもっとも重要なことは、この体制がスクアルノなしではありえない体制、つまり、スクアルノが死ねばこの体制も終わるという前提の上に作られた体制であつたことである。指導民主主義体制は、その意味ではじめから移行措置、経過措置だつた。

では、それにどのような歴史的意味があるのか。それを見るには同じ時期のビルマと比較すればよい。ビルマでは、一九五八年、反アアシスト人民自由連盟(バサバウ)の分裂によつて議会制民主主義が崩壊、一九五六一五九年のインドネシア政治にも似た紆余曲折の末、一九六二年、ネイ・ウインがクーデタによつて国権を掌握し、国軍を主体とするビルマ式社会主義体制を設立した。つまり、ビルマでは、議会制民主主義の崩壊は直ちに軍事政権の樹立につながつた。これに対し、インドネシアでは、スクアルノの指導民主主義が議会制民主主義にとつて代わり、国軍の国権掌握により本格的な軍事政権の成立を見るのは一九六六年、つまり七年の時間差があつた。

なぜか。もちろんスクアルノがおり、軍がスクアルノを必要とし、スクアルノが軍を必要としたからである。では、なぜ国軍はスクアルノを必要とし、スクアルノは国軍を必要としたのか。

なぜスカルノが国軍を必要としたのか、これは簡単である。スカルノは、地方反乱の鎮圧、西イリアン解放のため、国軍の組織と強制力を必要とした。では、国軍はなぜスカルノを必要としたのか。大きく三つの理由があった。

第一に、陸軍はスカルノの權威を必要とした。陸軍は戒厳令の発布、指導民主主義の成立によって、その政治的役割を拡大した。では、だれが戒厳令を発布し、一九四五年憲法復帰を宣言したのか。もちろんスカルノである。仮に一九五七年三月、「評議会」の地方政府奪取のとき、スカルノが戒厳令を発布しなかったならばどうなっていたか。「評議会」の地方政府奪取は権力篡奪となっていた。つまり、陸軍は、スカルノの權威なしに、その行政、立法府への進出を正当化できなかった。

第二に、陸軍将校には時間があった。スカルノはやがて死ぬ、彼らはスカルノより一世代若い、この単純な理由で、陸軍将校は待つことができた。

そして第三に、陸軍はなお分裂していた。地方反乱の鎮圧によりスマトラ、スラウエシは政府軍の占領下におかれ、「外島」の軍人は力を失った。しかし、ナスティオンが陸軍を掌握したとはとても言えなかった。陸軍参謀本部にもジャワの三師団にも、スカルノ派の将校はいくらでもいた。つまり、陸軍は、たとえクーデタによって國權の掌握を謀ろうとしても、ナスティオンの指揮下、撃つて一丸となる、という体制にはまだなかった。

しかし、指導民主主義体制下、一九六二―六三年頃までに、この第三の条件が変わることになる。それには大きく二つの理由があった。

第一に、一九六一年、スハルトの指揮下、陸軍参謀長直屬の陸軍一般予備軍が編成され、これが一九六三年には陸軍戦略予備軍司令部となった。戦略予備軍は西イリアン解放を直接の目的とし、一九六二年、スハルトは西イリアン解放マンガラ作戦司令官にも任命された。しかし、戦略予備軍は、武器裝備、練度いづれにおいてもジャワの三師団、西ジャワのシリワンギ師団、中部ジャワのデイボヌゴロ師団、東ジャワのブラウイジャヤ師団に勝り、陸軍参謀本部は一旦ことあらば実力によって地方師団を押さえ込む実力をはじめて手に入れた。

第二に、インドネシア政府は、一九五七年、西イリアン解放闘争の一環として、それまで鉱業、農園企業、海運、保険、金融部門を支配していたオランダ企業を接収した。これらの旧オランダ資産は、戒厳令下、陸軍参謀本部の管轄下におかれた。陸軍参謀本部は多くの将校を「経営者」としてこれら接収企業に送り込み、またその資産を予算外の資金源として食物にした。こうして陸軍ではこの時期、はじめて人事が動くようになり、ナスティオンが長年計画してきた陸軍の近代化、合理化が開始した。

こうした変化を象徴的に示したのが陸軍士官学校の開設であった。議会制民主主義時代、陸軍はあまりに多くの将校をかかえ、そのため一九五〇年代はじめには、革命時代にジョクジャカルタに設立された士官学校も廃止されて、将校の養成はほとんどやられない状態になった。ところが一九五八年、中部ジャワ、マグランに新しく陸軍士官学校が設立され、一九六〇年卒を一期に「マグラン世代」と呼ばれる新しい血が陸軍に供給されるようになる。そしてここでは、陸軍におけるジャワ人優位を矯正するため、出身地、エスニシテイ(言語集団)の人口バランスに配慮した士官候補生の選抜が行われ、一九八〇

年代半ば以降、その効果が表われるようになる。つまり、陸軍参謀本部は長期のヴィジョンのもとに陸軍の再編・合理化・近代化に着手したのである。

こうして一九六二―六三年頃には、陸軍はナスティオンの指揮下、必要とあらば、クーデタによって一挙に国権を掌握する体制をもつことになった。これはスカルノには脅威であった。ではどうするか。

スカルノは国軍の分断、分割支配のために、さまざまの手を打った。一九六二年七月には、スカルノはナスティオンを国軍参謀長に昇進させ、後任にスマトラ反乱鎮圧作戦の功労者、アフマッド・ヤニを任命、そのポストを陸軍参謀長から新設の陸軍司令官に格上げした。陸軍司令官は国軍最高司令官スカルノの指揮下にある。国軍参謀長はあくまで国軍最高司令官スカルノの補佐であり、陸軍司令官を指揮する権限はない。つまり、この人事は、体の良いナスティオン柵上げ人事だった。またスカルノは陸軍地域軍管区司令官⇨地方師団長人事に介入し、とくにジャワ三師団でスカルノ派将校を登用した。さらに海・空軍司令官、警察長官を陸軍司令官と同格に扱い、陸軍と海・空・警察軍の分断支配を行った。そして一九六三年六月には西イリアン解放闘争の終結を理由に戒厳令を撤廃し、地方行政の責任を少なくとも形式的には陸軍から内務省に移管した。

スカルノはまた、共産党を利用して陸軍の驕頭を抑えようとした。つまり、スカルノと陸軍の二者ゲームではどうも分が悪い、共産党を引っぱり込んで三者ゲームにし、自分は国軍と共産党の勢力均衡の調停者、仲裁者として生き残ろう、これがその戦略だった。共産党は一九五〇年代以来、ことあるごとに陸軍から弾圧された。したがって、共産党にとっては、スカルノの政治的保護は大きなプラスだった。

こうしてスカルノとアイデイトの共産党のあいだに取り引きが成立した。スカルノは共産党を保護する、共産党は党とその下部組織(インドネシア農民戦線、インドネシア婦人運動、インドネシア社会主義労働組合総連合、その他の)の全力を挙げて大衆動員を行いスカルノを支持する、これが取り引きのポイントであった。これによって共産党は大躍進を遂げ、一九六三年までには、黨員二五〇万、支持者数千万人の大勢力に成長した。

インドネシア研究者のあいだではかつて、この共産党大躍進の評価をめぐって論争があった。スカルノは共産党を革命勢力として育成したのか、それともアイデイト共産党はスカルノに飼い慣らされ革命勢力としての牙を抜かれたのか。これはもちろん答の出ない問題である。また共産党が崩壊して三〇



デレンションの著者「自伝」の著者
アイ・アダムズと踊る共産党書記長
アイデイト

年たつた今となつては、まったく過去の話である。しかし、この時期のスカルノとアイデイトの関係が日本占領時代の今村(およびその後継者)とスカルノの関係によく似ているということは、注目する価値がある。それは、少し具体的に言えばこういうことである。

指導民主主義時代、スカルノはなお革命を唱えていた。しかし、西イリアン解放は実質的に一九六二年に達成され、サバンからメラウケまで、この領域のたとえ一カ所でもオランダ支配の下におかれている限り、インドネシアの革命は終わらない、

そういう意味での革命は完了した。ではスカルノは、革命は終わった、と宣言したか。もちろん言わなかった。一九六三年、マラヤ、シンガポール、サバ、サラワクの合同によつてマレーシアが結成された。スカルノはこれを英国の新植民主義的陰謀と見なし、マレーシア粉砕、イギリス帝国主義打倒を訴えた。これがスカルノの「マレーシア対決」政策であつた。しかし、スカルノがいくらマレーシア対決を訴えても「人民」が支持しなければ説得力を持たない。共産党はそうした「人民」の支持を、大衆動員によつて目に見え、耳に聞こえる形で提供した。共産党はスカルノに「人民」の支持を提供し、その見返りに政治的行動の自由、大衆動員により党勢を拡大する保証を得た。そこでの前提は、共産党の方から見れば、人間スカルノはやがて死ぬ、いまやっていることは未来の革命のための予行演習だ、ということだつた。逆に言えば、スカルノは未来を担保に現在の共産党の支持を得た。もちろん日本占領時代と指導民主主義時代では、ひとつ大きな違いがある。今村はスカルノとだけ取り引きした。スカルノは陸軍、共産党、両方と取り引きした。

こうしてみれば、スカルノの指導民主主義が実に奇妙な体制だつたことがわかるだろう。わたしは先に、指導民主主義はスカルノなしでは存在しえない体制、その意味で経過措置、移行措置であると言つた。しかし、実のところ、これは不正確な表現である。われわれは議会制民主主義が崩壊して指導民主主義が成立し、それが一九六五―六六年に崩壊してスハルトの新秩序が作られたことを知っている。だから、経過措置、移行措置といつて、あたかも新秩序の到来が必然だつたかのように扱い、また議会制民主主義から軍事政権へという観点からインドネシアとビルマを比較する。しかし、未来にはいつでも、

いくつかの可能性がある。たとえマルクスの言うように人間はある一定の条件の下で歴史を作るにしても、人間が歴史を作るということに違はない。スカルノが終身大統領、革命の指導者として革命を訴えていたとき、彼のあとにスハルトがやつて来て軍事政権を作るとは決まっていなかつた。陸軍も共産党も、未来を担保にスカルノの現在を支持していた。

では、スカルノは何をやつていたのか。スカルノは、一九五〇年代、革命はまだ終わっていない、西イリアンがインドネシアに「戻る」まで革命は終わらない、だから自分が指導する、そういつて、ハッタ、マシユミ党と熾烈な権力闘争を行つた。このときスカルノは革命の大義のために国権の掌握を求めていた。しかし、その任務は一九六二年の西イリアン解放で完了した。筋を通すならば、スカルノには二つの選択肢があつた。ひとつは、スカルノの忠実な腹心、ジュアング・カルタウイジヤの考えたように、革命は終わった、これからは再建の時代であるとして、財政再建、インフレ克服、経済安定化に着手することであつた。一九六二年末の貨幣流通量は一三五五億ルピア、一九六〇年末の四七八億ルピアの三倍に達し、財政危機、インフレはよほどの覚悟でかからないと手に負えない状態になりつつあつた。もうひとつは、革命は終わった、これでわたしは引退する、と国政指導のバトンを次の世代のだれかに譲ることであつた。

スカルノは、そのいずれの選択肢も選ばなかつた。スカルノには「やめる」という選択は思いもよらなかつたであろう。スカルノはエゴの肥大した、オレが、オレが、というタイプの人間であり、「インドネシア」が自分を必要としていると確信していた。「再建」の選択肢は政治的に難しかつた。革命は

終わったと言え、共産党は確実に反対するだろう。しかし、もっと重要なことは、緊縮財政、金融引き締め、経済安定化の政策は、少なくとも短期的には国内の諸勢力、諸階層に負担をかけ、国内対立を激化させる。たとえば、国軍は経済安定化政策に反対だった。経済安定化政策をとるということになる、国防予算の削減が必至だったからである。それに比べれば、マレーシア対決といって予算を維持し、その政治的役割を正当化する方がはるかに望ましかった。スカルノは一九六三年前半、一時、経済安定化政策の採用を考えたはずである。しかし、このときジュアングが死亡した。一九六三年九月、スカルノはマレーシア対決を宣言した。IMF、米国は対インドネシア経済援助を停止し、スカルノはふたたび革命の完遂を訴えるようになった。

こうしてみれば、指導民主主義がどのような体制であるか、明らかだろう。それはスカルノが権力の磁場の中心にある体制であり、スカルノの目的は彼がこの磁場の中心に留まるということだった。つまり、別の言い方をすれば、自分は革命の偉大なる指導者、人民の代弁者、国権の最高機関、暫定国民評議会より主権を信託された者、終身大統領である、自分の生きているかぎり、自分が国権を掌握し、インドネシアを指導する、しかし、未来はおまえたちのものだ、これがスカルノの立場だった。したがって、陸軍も共産党も未来は自分たちのものだ、これは途中経過だ、と思っていた。この宙吊り状態、これが指導民主主義だった。では、これを正当化したスカルノの革命とは何だったのか。

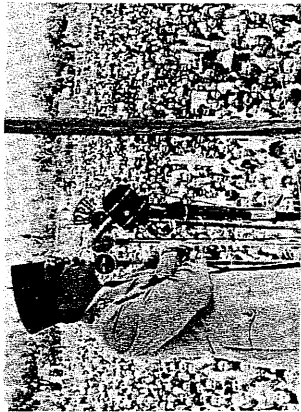
3 革命のロマンティシズム

スカルノの指導民主主義は、思想史的には、スタットモ・スリヨクスモの「民主主義と指導性」の系譜に連なる。たとえば、ここにスカルノの一九六三年独立記念演説がある。ここで彼は「民主主義」についてこう述べる。

「(毎年八月一七日の集会において)私はひとつの対話を行っているのである。誰との対話か。人民との対話である。それは私と人民の直接の応答であり、私自身と私の分身との直接の応答である。それは人間スカルノと人民スカルノの間の応答であり、ともに闘う仲間との間の応答である。それは本質的に一人である二人の仲間との間の応答である。

まさにその故にこそ、ジョクジャカルタでかジャカルタでかボゴールでかタンバクサリンでか、この八月一七日の演説草稿を準備するたびごとに、私はたちまち、ものに取り憑かれたようになるのである。その時、私の身体中に不思議な力がみなぎり、思考と感情が、精神と熱情とが渦巻き溢れでる。その時、聖なる森羅万象が私の体内で律動し炎上しまた躍動するかのようであり、それに比べれば私には火もお熱からず大海もお深からず、夜空の星ですらなお高からず思えるのである。

なぜならば、この八月一七日の演説は私にとって諸君との対話でなければならないからである。



壇上のスカルノ(1960年代)

この八月一七日の演説においてこそ、私はあばら家に住む者、露店に商う者、田や畑で働く者、これらの自ら語ることのできない者たちのその代弁者とならなければならないからである。……」土屋健治が正しく指摘するように、ここでスカルノの言っているのは、スカルノが人民の意思を明察し、明察された人民の意思がスカルノの内部に実在する、だから人間スカルノと人民スカルノの応答がおこるということである。しかも、この応答は集会のまえにすでにおこっている。スカルノの言い方を借りれば、彼は演説草稿を準備する時すでに人民に取り憑かれ、この憑かれたスカルノが、集会では聴衆に取り憑く。つまり、平たく言えば、スカルノは、自ら語ることのでき

ない人たちが何を望んでいるのか知っている。これは、親父はなんでも知っている、の権威主義の論理である。したがって、これだけ見れば、この人間スカルノと人民スカルノの図式は権威主義の図式であり、スタットモの「民主主義と指導性」、さらにあとで見ると、スハルトの指導概念とも同じ論理構造をもっている。またスカルノと聴衆の憑く、憑かれるという関係については、一九三二年のスカルノも一九六三年のスカルノも大きな違いはない。

しかし、この図式を余り強調しすぎると、指導民主主義も新秩序体制も同じになり、一九三二年のスカルノと一九六三年のスカルノが同じになる。人間や歴史がそんな平板なわけがない。重要なのは違い

である。

スカルノの指導民主主義とスハルトの新秩序は、同じく権威主義といつても二つの点で決定的に違う。第一に、スカルノは政敵を殺し、収容所に放り込んで、敵を物理的に破壊するということはやらなかった。体制に批判的な知識人は大学を追われ、政治家のなかには逮捕された人たちもいた。また言論の自由はかなり大幅に制限された。しかし、そこでの基本はあくまで説得であった。仮にスカルノが親父はなんでも知っていると言って、これに反対する人がいれば、スカルノはこの人を説得する、説得できる、というのがその基本であった。これに対し、スハルトは殺す。もしスハルトが親父はなんでも知っていると言ってだれか反対すれば、彼は「ぶん殴る」。説得と暴力、権威主義といつても権威の出所はまるで違う。

第二に、スハルト新秩序は親父の支配であり機構の支配であるが、スカルノの指導民主主義は親父の支配であつて機構の支配ではない。スハルト新秩序については後で述べる。ここでとりあえず注意すべきことは、指導民主主義がスカルノを磁場の中心とする親分・子分のネットワーク体制であり、それがともかくも機能するためには、陸軍、共産党のような権力中枢ばかりでなく、地域、政党、イスラム社会教育団体、海・空軍、警察、官庁その他、さまざまな利益代表を非常にきめ細かく磁場に取り込む必要があつたということである。したがって、ジャカルタの大統領官邸、第三夫人デウイ(日本名 根本七保子)のヤソウ宮殿、第二夫人ハルテイニのボゴール宮殿、こうした場所がスカルノの宮廷政治の場所となり、また政府の運営においてはできるだけ多くの人々がスカルノに直接会つてその決済を仰ぐこと

のできる体制にしなければならなかった。大臣の数が一九六四年に七十七人に達したのは、このためだった。こうしたことはスハルト体制下ではおこらない。スハルト時代になってスカルノ時代のような宮廷政治がなくなり、スハルトのインナー・サークルにはごく少数の人たちだけが属するのは、親父の支配とやらんで機構の支配が厳然と存在しているからである。

では一九二〇年代末、三〇年代はじめのスカルノと指導民主主義時代のスカルノでは、どこがどう違うのか。ごく単純化して言えば、オランダ時代の若きスカルノは政治的ロマンティストであり、かつ理想主義者であった。これに対し、一九六〇年代、老いたスカルノは政治的ロマンティストではあつても、もはや理想主義者ではなかった。オランダ時代、スカルノは、闘いによつて世界を変えることができると信じており、思想は彼にとって現実把握、現実変革のための手段であつた。したがつて、彼にとって「帝国主義」とは現にインドネシアを支配するオランダのことであり、「革命」とは国民意識を揺り動かし、覚醒させ、国民意思に鍛え上げることだった。自由インドネシアは、その上に構想された。しかし、一九六〇年代には、帝国主義、革命などのことばは、そうしたことばがかつてもつていた具体的意味内容を失い、シニカルな政治操作の手段となつてしまった。それを見るには、いくつか「スカルノ思想」の鍵となることばを検討すればよい。

まず「ナサコム」である。これはナショナリズム、宗教、共産主義を意味するインドネシア語、Nasionalisme, Agama, Komunisme からそれぞれ Nas, A, Kom をとつて作つた造語である。一九六〇年代、スカルノはナサコム体制、すなわちナショナリズム、イスラム、コミュニズムの統一を制度的に

実現する体制の樹立を訴えた。したがつて、それだけ見れば、一九二六年、若きスカルノが「ナショナリズム、イスラム、マルクス主義」の論文を発表し、これらインドネシア政治におけるイデオロギー潮流の統一を訴えた時とまるで同じに見える。しかし、実はそうではない。一九二六年の「ナショナリズム、イスラム、マルクス主義」はインドネシアの「運動」の分裂を克服し、共通の敵オランダに対して反帝・反植民地主義の統一戦線を結成する具体的な政治プログラムであつた。スカルノは運動の目的を「自由インドネシアの実現」一点に絞ることによつて、ナショナリズム、イスラム、マルクス主義のイデオロギー潮流に属するさまざまな党派が統一戦線を結成することができると信じていた。しかし、一九六〇年代、スカルノがナサコムを唱えたとき、彼自身、ナサコムの統一が可能であるとはもう信じていなかった。彼の目的は、ナサコムの統一を訴えることで三大イデオロギー潮流に属する諸党派の対立を封じ込め、沸騰点以下に抑え、自らを仲裁者としてバランスをとるということだった。つまりそれは権力のアクロバットであり、政治のプログラムではなかった。

同じことは「革命」についても言える。オランダ時代、帝国主義と言へばそれはオランダのインドネシア支配のことであり、革命とはオランダ支配からインドネシアを解放することであつた。そしてここで独立と革命が等置されたのは、スカルノが、インドネシア独立のためには国民を揺り動かし国民意識を覚醒させ、国民意識を国民意思に鍛え上げなければならない、と信じていたからであつた。では一九六〇年代にはどうか。ここに一九六〇年の独立記念演説の一節がある。

「革命の論理を理解しない人たちがいる。それは、塗半ばで、革命はもう終わった、と言う人た

ちである。ところが革命はまだ終わっておらず、まだずっと、ずっと、もうひとつずつと進行している。われわれはひとたび革命に火をつけたならば、その全ての理想が完遂されるまでわれわれは革命を続けなければならない、これが革命の論理である。これが絶対的に革命の法則であり、これはもはや避けることも止めることもできない。したがって、革命がなお進行中に、『革命はすでに終わった』とは言わない、そしてそれが革命の次の局面なのに、その革命の局面をせき止めたり反対したり妨害したりしようとするな。

また、すべての局面を理解し同意しておりながらこう言う人たちがいる。『われわれはいつも革命精神を煽り立てる必要があるだろうか。すべてがかく革命的にやらなければならないだろうか。』『もつと辛抱強いやり方でできないだろうか。ゆつくり、しかし、着実に、のやり方でできないだろうか。』

なんということだ！『ゆつくり、しかし、着実に！』これは不可能である。もしわれわれが人民に粉碎されたくなければ、これは不可能である。……』

「今日のこの世界は、革命の弾薬庫である。今日のこの世界は、革命の電気をはらんでいる。今日のこの世界は、革命の怒気に満ちている。この大地の上にある全人類の四分の三が、昨年の演説でわたしの述べたように革命の中にある。かつてこれまでの人類の歴史において、今日のようなかくもすばらしい、かくもすさまじい、かくも広くかくも普遍的な革命を経験したことはなかった。人類が同時に大地のあらゆるところで熱狂し、雷鳴している。

そしてわれわれはミミズみたいに、ゆつくりゆつくりやりたいのか。『ゆつくり、しかし、着実に』やりたいのか。……

革命恐怖症に罹っている諸君、認識せよ！われわれは革命の中にいる。この革命は、ちっぽけな革命ではない。この革命は、かつてのアメリカ革命、あるいはかつてのフランス革命、あるいは今日のソヴェト革命よりももっと大きな革命である。」

これは指導民主主義時代はじめてのスカルノの独立記念演説であつた。ここでスカルノは革命について語る。しかし、この「革命」のなんと空虚なことか。それはもはやなんの具体的な意味内容ももたず、ただ雷鳴のように轟くひとつの時代精神にすぎない。

では「マルハエン」はどうか。これについてはすでに述べた。インドネシア社会の変革は、はじめからスカルノの政治プログラムにはなかつた。彼はその意味で社会的にははじめから保守的であつた。しかし、オランダ時代には、マルハエンはそれでもなお政治的に革命的意味をもつた。オランダ支配とマルハエンのあいだに「階級的に国民的」矛盾が存在したからである。しかし、インドネシア独立が達成されれば、マルハエン概念のそうした革命性は失われてしまう。そこでマルハエンイズムとはインドネシア社会主義であると言つたところで、それは現状をあるがままに肯定するにすぎない。

したがって、指導民主主義は、社会的には保守的、政治的・イデオロギイ的には吊りの体制だつた。しかし、この体制は革命によつて正当化された。では、指導民主主義はいかにしてその革命性を確保したのか。この革命性と一九六五―六六年の破局とはどのような関係にあるのか。

4 破局への途

指導民主主義はスカルノの死とともに終わるはずの体制だった。しかし、実際には、この体制はスカルノの死ではなく、おそらく五〇万に上る人々のおびただしい死とともに崩壊し、その死は、それから三〇年たった現在、もうひとつの体制がいよいよ終わりに近づくなか、なお暗く長い影をインドネシアの現在と未来に落としている。インドネシア人が指導民主主義体制の終焉でまず思い浮かべるのは、このおびただしい死である。では、どうしてこのような破局がおこったのか。

この問題をいまこうしてあらためて考えてみると、指導民主主義の終わりの始まり、破局の始まりは、どうも一九六三年にあつたように思える。この年、二つ重要なことがおこった。第一に、「西イリアン解放」が完了し「マレーシア対決」が始まった。第二に、戒厳令が撤廃された。西イリアン解放によってスカルノ本来の意味での革命は終わり、このあと「革命」は具体的意味内容を失い、体制の正当化シンボルでしかなかった。しかし、大衆動員なしの革命はありえない。指導民主主義は「革命的」であるために国民を絶えず動員せねばならなかった。動員のための動員の条件は戒厳令の撤廃によって整備された。これにより陸軍は政党の「街頭」活動を合法的に制御できなくなり、政党は、共産党ばかりか、国民党、ナフダトゥール・ウラマー、その他の政党も、スカルノ支持の大衆動員にその新しい役割を見出した。

一九五九一六〇年、指導民主主義時代の初期、政党は非常な危機に陥った。マシユミ党、社会党は非合法化され、ゴトン・ロヨン国会の召集、「機能」代表制の導入によって、議会ももうかつてのような力を持たなくなった。政党が議会活動で生き延びることのできないのは明らかだった。ではどうするか。すべての党が同じことをやった。あるいはスカルノの政治的保護を得てこの時期、急速に党勢を拡大した共産党が他党のモデルになったということからすれば、国民党もナフダトゥール・ウラマーもその他の政党も、みんな共産党と同じことをやった。つまり、青年団体、労働組合、農民組合、婦人団体、学生団体、その他の団体を設立し、集会、デモを組織し、大衆動員によって支持基盤の維持、拡大を試みた。

問題は、そうした大衆動員、党勢拡大が選挙の展望なしに行われたことである。仮に選挙があれば、政党の支持基盤拡大競争は選挙で決着を付けられる。選挙が定期的に行われれば、今回負けても次がある、ということになる。そうしたなかで平和的競争の規範が政党のあいだに定着する。指導民主主義の下ではこういうダイナミズムは作動しなかった。そのかわり、政党は動員合戦、勢力誇示合戦をやった。つまり、仮に国民党が五万人の集会をやれば、次の週にナフダトゥール・ウラマーは一〇万人の集会をやると、その次の週には共産党が一五万人の集会をやると、ということになった。怖いのは、もちろん政党勢力同士の衝突である。スカルノが「マレーシア対決」によって外に敵を求めたのは、そのためであった。また「ナサコム」によって、ナショナリズム、イスラム、共産党の「統一」を訴えたのも、そうした政党勢力の動員合戦を封じ込め、沸騰点以下に抑え込むことを目的としていた。しかし、それでも小

競り合いはおこる。一九六四年、東シヤブにおける共産党とナフダトゥール・ウラマーの衝突は、その一例である。これは土地改革、農業改革をめぐる共産党の「一方的行動」を契機としておこった。これ以降、共産党勢力と反共勢力は一触即発の状態となった。こういう状態で一方が他方を一方的にやっつけることができるということになると、惨憺たる結果となるのは、もう目に見えている。

しかも、こうした政党的動員合戦が経済の崩壊するなかで進行した。一九五七年のオランダ資産接收以来、外国からの直接投資はほとんど止まってしまった。IMF融資、米国の経済援助は一九六三年に停止した。国民総所得に占める公共部門の割合は、一九六〇年の一三%から一九六五年の一・五%に低下した。一九六三―六四年には、歳出が歳入の二倍を超え、スカルノは中央銀行に命じて紙幣を印刷させた。つまり、スカルノは、占領時代の日本軍と同じことをやった。悪性インフレがおこり、消費者物価は一九六三年、一一九%、六四年、一三四%、六五年一月八月には五〇%、高騰した。

したがって一九六五年ともなると、破局の近づきつつあることはだれの目にも明らかだった。こんなことがいつまでも続くはずがない、何かがおこる、それはそんなに遠い先のことではない。日本軍占領時代と同じく、一つの時代の終わりが予感され、そのなかでインドネシアの政治は、陸軍と共産党を二つの極としてはつきりと分極化していった。

その時スカルノが倒れた。一九六五年八月五日のことである。たちまちクーデタのうわさがジャカルタの町を流れ、スカルノが死ねばこの体制も終わる、何かがおこる、そういう切迫感をもつてうわさが受け止められた。九月三〇日運動がおこったのは、そういう状況においてであった。

一〇月一日早朝、ハリム空軍基地を司令部とする九月三〇日運動指揮下の部隊がナスティオン国軍参謀長、アフマッド・ヤニ陸軍司令官以下の陸軍司令部高級将校宅を襲撃し、ヤニ以下、六人の高級将校を拉致、殺害した。また決起部隊はジャカルタ中央で、大統領官邸、国営ラジオ放送局、電話局を占拠した。決起グループの指導者、ウントワン中佐は、九月三〇日運動は「将官評議会」のクーデタ防止のため今回このような措置を取ったと声明し、革命評議会の設立、陸軍における大佐以上の階級の廃止を宣言した。

九月三〇日運動の中心的指導者は、チャクラピラワ大統領親衛隊のウントワン中佐、陸軍ジャカルタ地域軍管区第一旅団長ラティフ中佐、ハリム空軍基地司令官スヨノ空軍少佐の三人であり、運動の目的は「将官評議会」のクーデタ計画防止とされた。この運動の性格については、今日まで、共産党異議説、軍内問題説、スカルノ関与説、共産党関与説、スハルト関与説と、さまざまな説が提出されている。



アフマッド・ヤニ陸軍司令官 (1963年)

しかし、次の三点についてはほぼ確実に言えるだろう。

第一に、「将官評議会」のようなものが正式に結成されていたとは思えないし、ナスティオン、ヤニを中心にクーデタの具体的計画があつたとも考えられない。ヤニ陸軍司令官と陸軍高級参謀は、毎日、陸軍司令部で会っていた。彼らは当然、政治問題も議論したであろうし、スカルノに何かあつた際の緊急措置を講じていなかったはずもない。しかし、その

ためにわざわざ「将官評議会」のようなものを作る必要はなかったし、いますぐクーデタによって国権を掌握する必要もなかった。

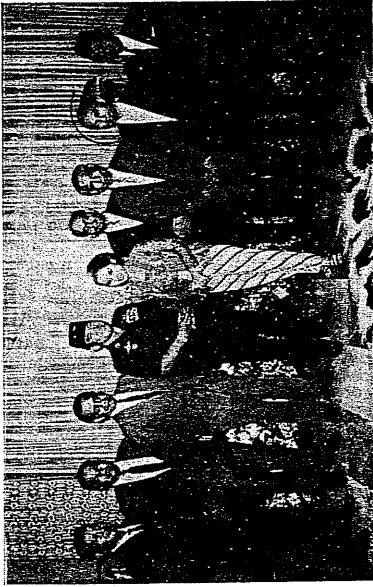
第二に、アイデイト書記長はじめ、共産党中央委員会委員の一部が運動に関与したのは、まず確実である。しかし、それはこの運動が、政府の言うように、共産党の陰謀だったということにはならない。運動は、ウントゥンほかの「進歩的」将校のイニシアティブによって指導され、共産党はこれを利用して、陸軍と共産党の力関係を共産党に有利にしようとしたと考えた方がよい。

第三に、一〇月一日朝、何かがおこるであろうことは、アイデイトばかりでなく、他にもいろいろ知っている人間がいた。空軍司令官オマール・ダニは確実に知っていたし、スカルノ、スハルトもおそらく知っていた。ただ、だれも正確に何がおこるかは知らなかったであろう。何かがおこる、そのおこるのを待つて、情勢を把握し、なんらかの対応を決める、そういうことだったであろう。

しかし、九月三日運動は二四時間で崩壊した。一〇月一日朝、ヤニ陸軍司令官等拉致の報を受けた陸軍戦略予備軍司令官スハルト少将は、ただちに陸軍の指導権を掌握した。この日、スカルノはハリムに行き、ヤニ殺害を聞いた直後、陸軍司令官ポストを自ら掌握、ブラント・レクソサムドロ少将(陸軍司令部人事参謀)を補佐に任命した。しかし、スハルトはブラントのハリム出頭を許さず、代わってサルウォ・エディ指揮下の陸軍空挺連隊に命じて九月三日運動の鎮圧に乗り出した。ジャカルタ中央に配置された決起部隊は同日夕までにハリム空軍基地に撤収し、ハリムにいたスカルノはボゴール宮殿に移動、翌一〇月二日早朝、陸軍空挺連隊のハリム空軍基地掌握によって運動は崩壊した。

スカルノは、一〇月二日、ボゴール宮殿でスハルトと会った。ここで取り引きが行われた。スハルトはスカルノが陸軍司令官を兼務し、陸軍司令部人事参謀ブラント・レクソサムドロをその代行に任命することを承認した。スカルノは「治安秩序回復」に必要とされるすべての権限をスハルトに与えた。これがスカルノの致命傷になった。

スカルノは、九月三〇日事件を「革命の大海」におけるさざ波といって片付けようとした。これはヤニ以下の陸軍将校が殺されていなければ、うまくいったかもしれない。しかし、彼らの殺害がすぐ明らかとなった。一〇月三日、彼らの遺体がハリムで発見され、翌日、その葬儀が大々的に行われた。スハルトは、九月三〇日事件(Gerakan September 1965)をナチのゲシュタポに掛けて「ゲスタプ G55 555」と呼び、事件は共産党の陰謀であると、報復を訴えた。そのあとスハルトは「治安秩序回復」の名の下に、何も言わずただ黙々と共産党勢力の物理的破壊に全力を投入した。一〇月二日、ナフダトワール・ウラマトのサブヒヤン、カトリック党のハリ・チャン・シラライを中心として、反共政党、団体の行動戦線が結成された。一〇月八日、行動戦線デモ隊によりジャカルタの共産党本部が破壊された。ついで一〇月下旬、反共行動部隊、インドネシア学生行動戦線(RAMU)、生徒青年行動戦線(KAPP)、学士行動戦線(KASU)が結成された。陸軍戦略予備軍司令部の将校、ケマール・イドリス(参謀長)、ヨガ・スガマ(情報参謀)、アリ・ムルトボ(情報副参謀)などが行動戦線の内面指導を行った。共産党勢力の解体は中央ではスハルトの治安秩序回復作戦司令部によって指揮され、一方、地方では、その作戦の実施方は地域州、地方(旧理事州)、地区(旧)の陸軍軍管区司令官に任された。共産党員、支持者、その



スカルノと新内閣。左からスハルト、ルスラン・アブドゥルカニ、スルタン・ハメタク・ブウォノ九世、スカルノ、デウイ、ウマルカデイ、レイメナ、アダム・マリク、イダム・ハリッド(1966年3月、スハルト新秩序成立の直後)

他の大量殺人は一〇月上旬、北スマトラのアチエ始まり、ついで一〇月中旬から一月下旬にかけて中部ジャワ、東ジャワ、バリで行われた。この時どれほど多くの人たちが殺されたのかは明らかでない。しかし、一九七六年、時の治安秩序回復司令部参謀長ストモ海軍提督の推定では、一九六五年一〇―十二月の時期におよそ四五―一五〇万人が殺害されたという。

共産党はこれによつて解体した。また、それとともに指導民主主義体制も崩壊した。インドネシア国民の大同団結をめざしたスカルノ生涯の事業は、インドネシア人によるインドネシア人の大量殺戮によつて崩壊した。スカルノはもうスハルト陸軍司令官兼治安秩序回復作戦司令部司令官の指揮する陸軍を抑えることはできなかった。しかし、それでもスカルノは抵抗した。九月三〇日事件

を一〇月一日事件と呼び、共産党の非合法化を拒否し、スバンドリオ、オマール・ダニ空軍提督、その他の大臣、軍人を陸軍の逮捕から保護しようとした。

この権力闘争は、一九六六年三月二日、スカルノからスハルトへの大統領権限委譲で決着をみた。

これでスカルノの時代は終わり、スハルト新秩序体制が始まった。スハルトは一九六七年三月七日、大統領代行に就任、一九六八年三月二七日、正式にインドネシア共和国第二代大統領に選出された。

スカルノはその時までにはもう過去の人となっていた。ファトマワティ(第二夫人)、デウイ(第三夫人)、ハリアティ(第四夫人)はスカルノと離婚し、ハルティニ(第二夫人)だけが残った。スカルノは一九七〇年六月二日、ジャカルタで死亡した。

スカルノはその「自伝」のなかで、自分が死んだら、かつて彼が農民マルハエンに会ったバンドウンの郊外、涼しいアリアンガンの高地に埋めてほしい、そしてその墓にはただ、人民の代弁者ブン・カルノ、ここに眠る、とだけ記してほしいと述べた。しかし、その願いは適えられなかった。彼は、スハルトの指示で、スカルノの母の眠る東ジャワ、ブリタルに、ガラス張りの廟のなかに埋められた。

峽を舞台にゴム、コブラ、タバコなどの農産物をストモ海軍少将指揮下の海軍艦艇を使ってシンガポール、ペナンに密輸出し、秘密資金調達、特務機関のネットワーク拡大を行った。スハルトは、一九六五年九月三〇日までには、ポストにおいても、人脈、資金においても、すでにきわめて有力な地位を陸軍内で築き上げていた。

5 クーデタ

スハルトは「自伝」のなかで一九六五年九月三〇日事件の経緯を詳細に説明する。以下は、その冒頭の一節である。

「一九六五年九月三〇日。およそ夜の九時頃、わたしは妻とともにガトット・スプロト病院にいた。わたしたちの子供の見舞いだつた。トミーはまだ四歳だつたが、熱いスープをかぶつて病院で手当を受けていた。わたしたちは病院に結構長くいた。それはトミーがみんなから可愛がられていたからだつた。夜の一〇時頃、わたしはラティフ大佐がトミーの病室のまえを歩いているのを見かけた。一二時一五分頃、わたしの妻は、まだ一歳になったばかりの未婚、マミツクのことを思い出して、わたしに早くハジ・アグス・サリム通りにあるわたしたちの家に帰るよう言った。わたしは家に帰り、妻はトミーと病院に留まることにした。帰宅すると、わたしは横になりすぐ眠ることができた。しかし、一〇月一日、およそ夜明けの四時半頃、インドネシア・テレビのカメラマン、ハミ

ツドがわたしのところにやって来た。彼は映画の撮影を終えたところだつた。彼は何ヵ所かで銃の発射音を聞いたと知らせしてくれた。そのときわたしは、まだそれほど長くは考えなかつた。半時間後、お隣りのマスフリがさつき多数の発射音を聞いたと知らせに来た。わたしは少し考えはじめた。半時間後、プロト・クスマルジョがやって来て、何人かの陸軍高級将校が拉致された、と驚くべき報告を伝えて来た。わたしはすぐに野戦服を身に付けた。朝の六時、パツ・ウマル・ウィラハデイクスマの命令により、サジマン中佐が、独立記念塔(モナス、モニユメン・ナシオナル)と大統領官邸周辺に所属不明の多くの部隊がいると報告にきた。わたしはもう肩章付きの服装をしていた。服装を整え、銃、帽子、靴を身に付けた。わたしは、パツ・ナスティオン、ヤニ大将、その他、陸軍高級将校拉致事件のあつたことをサジマン中佐に伝えた。「すぐに戻つて、パツ・ウマルに報告せよ、わたしはすぐ陸軍戦略予備軍司令部に行く、暫定的に陸軍の司令権を掌握する」、こうわたしはサジマンに言った。」

ここにはひとつ「うそ」がある。スハルトはガトット・スプロト病院でラティフを見かけたのではない。彼はラティフに会つた。ラティフがスハルトに会いに来た。ラティフ中佐は当時、ジャカルタ地域軍管区司令部の第一旅団長、チャクラビラワ大統領親衛隊大隊長ウントワン中佐とともに、九月三〇日運動の中心人物であつた。スハルトとラティフがそこで何を話したのか、それはもちろんわからない。しかし、およその推測はつく。スハルトはデイポヌゴロ時代、ラティフの上官だつた。彼がどのような思想的傾向の持ち主か、誰と親しいか、スハルトが知らないはずがない。誰がターゲットか、別に具体

的に言わなくとも、「進歩的将校」が決起しようとしている、こうラティフが言つて、暗にスハルトの支持を求め、スハルトが何も言わずただうなずく、そういうことがおこつたのではないか。スハルトはいまでも閣僚、軍人に、あれこれ細かく指示したりはしない。彼らが指示を仰いでも、普通、ほんの片言隻語、ときにはただちよつとうなずくといった身振りでその意向を伝える。ラティフはスハルトの承認を得られたと考えたのだから。そう考えれば、謎は氷解する。スハルトは当時、陸軍の事実上のナンバー2だった。しかし、一〇月一日早朝、スハルトは決起部隊のターゲットにならなかつた。また決起部隊は一〇月一日の朝、ジャカルタ中央で三カ所、戦略的要地を占拠した。大統領官邸、国营ラジオ放送局、電話局である。陸軍戦略予備軍司令部は独立立場に面し、国营ラジオ局、電話局と同じ通りにあつた。ウントウン、ラティフは、陸軍戦略予備軍司令部に米国の軍事援助で作られた全国通信ネットワークのあることを知っていた。しかし、それでも、戦略予備軍司令部にはまったく手が付けられなかつた。またスハルトは決起部隊が独立広場にいることを知つていながら、一人、ジープを運転して陸軍戦略予備軍司令部に行った。一九四六年七月三日事件においてスタルソノ少将がスハルトを味方だと考えたように、ラティフは、スハルトは自分たちの味方だ、と思つたのだから。そしてスハルトは、ラティフとほんの數分話をしただけで、ナスティオンとヤニがターゲットになっていることくらいはもうわかつていただろう。

これはもちろん仮説である。しかし、こういう仮説を立ててスハルトの「自伝」の右の一節を読めば、一〇月一日早朝、スハルトが何をしようとしていたのか、少しは明らかになるだろう。スハルトは、ス

カルノ、アイディット共産党書記長、オマール・ダニ空軍少将と同様、その日の朝、何かがおこるといふことをおそらく知つていた。一〇月一日早朝、何かがおこつていとの情報が次々と入つてきた。スハルトはじつと待つた。陸軍高級将校が拉致された、この情報を受けてスハルトははじめて動いた。ジャカルタ地域軍管区司令官ウマール・ウイラハダイクス少将から連絡が入つたときには、スハルトはもう何をなすべきかを決めていた。戦略予備軍司令部に行く、そして陸軍の司令権を掌握する、これがスハルトの決断だった。ウントウンの声明によれば、九月三〇日運動は「将官評議会」のクーデタ計画を防止する予防クーデタであつた。しかし、一〇月一日の朝、実はもうひとつ別のクーデタが同時進行

していた。ヤニに代わつて陸軍の司令権を掌握するスハルトのクーデタである。スハルトは一人、ジープを運転してまづすぐ陸軍戦略予備軍司令部に行った。

七時一〇分、国营ラジオがウントウンの声明を放送した。ウントウンの名前を聞いただけで、どういうグループが決起したが、スハルトはわかつたと言う。あいつはマデイウン事件の前、アリミンから政治教育を受けたやつだ、これが「自伝」のなかでスハルトがウントウンについてくり返し語ることである。スハルトは九時に戦略予備軍参謀会議を開催、九月三〇日運動を「反乱」と規定して対応策を協議し、一〇時にはウマール・ウ



ナスティオン。左の肖像は1965年10月1日早朝、9月30日運動決起部隊に殺された彼の娘

イラハダイクスマ少将の合意を得て陸軍の司令権を掌握、一時、陸軍空挺連隊司令官サルウォ・エダイ大佐を呼んで、国営ラジオ局奪取を命令した。

この頃、スカルノは、九月三〇日運動の司令部、ハリム空軍基地にいた。スカルノはヤニ殺害を知らされると直ちに陸軍司令官ポストをみずから掌握し、陸軍参謀本部人事参謀プラント・レクソサムドロ少将を陸軍司令官代行に任命した。副官が陸軍司令部に派遣され、プラントにハリム空軍基地への出頭が命令された。しかし、スハルトはプラントの出頭を禁止し、プラントは陸軍戦略予備軍司令部にとめおかれた。

ここまでくれば、九月三〇日事件の基本的性格はもうすでに明らかだろう。先にも述べたように、九月三〇日事件については、共産党陰謀説、陸軍内部説、共産党関与説、スカルノ関与説、スハルト関与説と諸説ある。しかし、スカルノ、スハルトいずれも、ダイボヌゴロ師団将校が事件の主役であることをはつきり認識していた。九月三〇日運動の中心人物、ウントウン、ラティフはいずれもダイボヌゴロ出身である。また一〇月一日午前、スカルノとスハルトが中部ジャワの状況をどの程度正確に把握していたかは明らかでないが、この頃までに、ダイボヌゴロ師団情報参謀スヘルマン大佐の指導下、中部ジャワ各地でも九月三〇日運動が進行中だった。スマランの師団司令部、サラテイガ、シヨクジャカルタ、プルウォクルトの地方軍管区司令部、スラカルタの第六歩兵旅団司令部で下剋上の運動があり、中部ジャワ駐屯七大隊のうち、五大隊が九月三〇日運動支持を表明した。またスマラン、シヨクジャカルタ、スラカルタその他の町で革命評議会が結成された。スハルトが、ウントウンの名前を聞いて直ちにどう

いうグループが裏にいるかわかったというのは、そういう意味である。スカルノも事件の処理のために同じことを考えたであろう。しかし、スカルノは、スハルトが「石頭」で、彼の思い通りにならないことを知っていた。だからプラントを任命した。彼はダイボヌゴロ師団長時代のスハルトの参謀長、一九五九年、スハルトの解任に際し、後任の師団長に任命された人物であった。

一〇月一日早朝、ジャカルタ中央に動員された部隊は、東ジャワ、ブラウイジャヤ師団所属の一大隊とダイボヌゴロ師団所属の一大隊であった。このうちブラウイジャヤの部隊は、ブラウイジャヤ出身将校の説得により、夕方までに原隊に復帰し、ダイボヌゴロの部隊はハリム空軍基地に撤退した。ジャカルタ中央は戦略予備軍、空挺連隊の支配下に入り、スハルトは同日夜九時、国営ラジオにおいて彼が陸軍の司令権を掌握したと声明、九月三〇日運動を「反革命」と断罪した。

九月三〇日運動の「クーデタ」はその翌日、一〇月二日の早朝、陸軍空挺連隊によるハリム空軍基地占領で崩壊した。ウントウンは中部ジャワに逃亡し、そこで殺された。ラティフは逮捕され、いまなお獄中にある。一〇月二日、スハルトはボゴール宮殿でスカルノと会談した。スハルトはプラント・レクソサムドロの陸軍司令官代行任命を受け入れ、かわりに「治安秩序回復」に必要なとされるすべての権限を手に入れた。

共産党の物理的破壊、指導民主主義の解体は「治安秩序回復」の名の下に行われた。中央ではスハルトの治安秩序回復作戦司令部がこの「作戦」の指揮をとり、地方では陸軍地域軍管区、地方軍管区、地区軍管区司令官が「作戦」実施を担当した。一九六六年はじめまでに「作戦」はほぼ完了した。しかし、



モハマッド・ユスフ

スカルノはそれでも抵抗し、この現実を認めようとはしなかつた。これが一九六六年二月二日の内閣改造で明らかにされた。スカルノはスバンドリオ、オマール・ダニ、その他の容共派を閣僚に留め、一方、ナステイオンを解任して、デイボヌゴロ師団におけるかつてのスハルトの上司、サルヒニ・マルトデイハルジョ少将を後任の国防治安担当調整大臣に任命した。またムルシッド少将陸軍副司令官、ハルトノ海兵隊少将などのスカル

ノ派将校を閣僚に登用した。スカルノがスハルトの思い通りにならないことは明らかだった。陸軍戦略予備軍司令部将校、陸軍空挺連隊将校の内面指導により、学生が街頭に動員された。スハルトの意向に従うか、ジャカルタを混乱状態にするか、これがスハルトからスカルノに送られたメッセージだった。

三月一日、大統領官邸で閣議が開かれた。スハルトは「風邪」で欠席した。このとき空挺連隊所属部隊が大統領官邸前、独立広場に動員された。ケマール・イドリス陸軍戦略予備軍司令部参謀長の説明では、スバンドリオ、オマール・ダニ空軍提督逮捕のためであった。この報を受けて、スカルノは、スバンドリオ、ハイルル・サレと共にヘリコプターでボゴール宮殿に逃亡した。スハルトはアミール・マフムッド、モハマッド・ユスフ、バスキ・ラフマットの三人の将官をボゴール宮殿に派遣し、スカルノは彼らの要請に応じて同日、大統領命令書を作成、署名した。これでスカルノからスハルトに大統領権限が委譲された。スハルト新秩序の始まりである。

スハルトの「新秩序」は、一九六六年三月二一日、スカルノからスハルトへの大統領権限委譲によつて成立した。これはクーデタであつた。しかし、スハルトはこれはクーデタではないと言う。大統領権限の委譲が「合法的に」三月二一日命令書によつて行われたからである。三月二一日はこゝう手品によつてスハルト新秩序が誕生した日であり、聖なる文書、三月二一日命令書(Surat Perintah Sebelas Maret)は、ジャワの影絵芝居、ワヤンにおける道化にして最高神、スマールにちなんで「スパースマール Sg persemar」と呼ばれる。スハルトは、この日以来、これまで三〇年間、一九六八年、七三年、七八年、八三年、八八年、九三年と、六度、国民協議会という手品で大統領に選出されてきた。

ではスハルトはなぜ、またいかにして、かくも長期にわたつて政権を維持することができたのか。スハルト新秩序とはどのような体制なのか。どのような変化がおりつつあるのか。以下、本章ではスハルト新秩序体制の構造、その運転原理を論じ、次章で一九八〇年代半ば以降のその変貌を見ることにしよう。

1 新秩序の二重性

開発主義と家族主義

スハルト新秩序とはどのような体制か。スハルト新秩序体制を、ごく簡単に定義すれば、これは「安定」と「開発」を国策の課題とし、その課題達成の実績によつて自らを正当化する体制である。それをもう少し敷衍すれば、次のように言える。

まずはじめに国軍と内務省がある。この二つが中心となつて国民統治・国民監視の機構を作る。隣組、警防団、青年団、婦人会、官製労働組合、官製農民組合、官製商工会議所が組織され、公務員は「与党」ゴルカル(機能グループ)参加、大政の翼賛を義務付けられる。政党は骨抜きにされ、労働者、農民、行商人、学生などの社会勢力は「非政治化」されて政治過程から排除される。五年に一度、総選挙が開催され、この「成功」によつてゴルカルが勝利し、国民自治が国民統治に転換される。これが「安定」の政治である。次に、こうして達成された「安定」の下で「開発」の政治が行われる。テクノクラットリエコノミストが、工業化、農業振興を二本立てとする「合理的」経済開発政策を立案・実施し、マクロ経済運営を行う。世界銀行、日本などの援助、国内・国外からの民間直接投資、石油ガス収入をもとにした政府資金の投入によつて経済が拡大し、工業化が進展し、米の自給が達成され、雇用が創出される。そしてこれがさらなる政治的安定に寄与し、新秩序に対する国民の正当性信仰を培養する。

これが新秩序に通底するひとつの論理、「安定」と「開発」の政治である。これに注目すれば、新秩序体制は、たとえば一九五〇年代末から七〇年代はじめ、サリット、タノーム、プラパット時代のタイ、六〇年代後半、七〇年代前半のブラジル、チリなどととも、軍・官僚権威主義体制、開発独裁などと規定できる。そこで重要なことは、新秩序における「開発」の論理が決してインドネシアに固有のものでなく、一九三〇年代、ニュー・デイルにはじまった生産性の政治、経済成長の政治、あるいはその第三世界的適用である開発主義の政治の系譜を引くというにある。しかし、このことは、スハルトが「安定」と「開発」の課題達成のために目的合理的に新秩序を編成したということではない。実のところ、新秩序には「安定」と「開発」の論理とならんで、もうひとつ別の論理が作動している。あるいはスハルトがすでにデスポスゴロ師団長時代にこういう手法をとっていることからすれば、こちらのほうがスハルトのオリジナルと言うべきかもしれない。これが家族主義である。

これを理解するには、次のような事情を考えればよい。国家がひとつの機構として一元的に国民の統治を行うとすれば、財政の一元的管理はその当然の要件だろう。仮に文部省高等教育局が国立大学の新入生から入学金以外にそれに倍する「寄付金」を徴収し、これを財源に大蔵省に何の相談もなく国立大学教職員の給与補填を行えば、日本ではまちががなくスキャンダルになるだろう。あるいは警察が勝手に財団を作ってタクシ会社、バス会社を営営し、そこからの揚がりやを警察官の福利厚生に財源にしても同じことである。ところがインドネシアでは法務省入国管理局、陸軍戦略予備軍司令部、ジャカルタ特別区政府、大統領府といった国家機関が、財務省の関知せぬところで、財団の企業活動、「手数料」

徴収、「寄付」などによつて公然と資金を調達し、これを給与の補填、災害援助、奨学金供与、医療費補助、公務員住宅整備、政治資金などに使っている。誰もこれを問題にしないし、ときにはこれが相互扶助の「家族的」美徳とされる。そしてこうした給与補填、裏資金調達の慣行は「大家族」陸軍戦略予備軍、「大家族」ジャカルタ特別区政府、「大家族」法務省入国管理局といった表現に見る通り、家族主義のイデオロギーによつて正当化される。つまり、一人占めすると「汚職・腐敗」になるけれど、みんなに分ければ家族主義の精神に適ったことになり、そのような相互扶助組織として国家が「大家族」あるいは「大家族」の集合体としてイメージされる。

大統領官邸とチェンダナの私邸

では、スハルトはこうした開発主義の政治と家族主義の政治をどのようにやってきたのか。右の説明からもすでに明らかな通り、安定と開発の政治はフォーマルな論理にもとづき、家族主義の政治、あるいはもつと端的にコネの政治はインフォーマルな慣行に従う。スハルトがこの二つをどう使い分け、どうバランスをとるか、それを理解するには、彼が「公」「私」の別について「自伝」のなかでどのような説明をしているか、見ればよい。スハルトはこう語る。

一九六八年三月、スハルトは正式に第二代大統領に選出された。このとき彼は、それまで住んだジャカルタ中央の高級住宅街、メンテンのハジ・アグス・サリム通りの旧邸から、現在のチェンダナ通りの新居に移り、大統領官邸には住まないことにした。これは別に巻で罵られるように、スカルノの怨念を

避けるためではない。それは家族のために良かれと思つて行つた決断だつた。大統領官邸に住めば、子供たちは社会から切り離されてしまう。子供たちの将来のためには、チェンダナ通りに住んで、子供たちを普通に育てたほうがよい。

これは妙な話である。大統領官邸に住もうがチェンダナの私邸に住もうが、子供たちは学校に行く。友達もいる。彼らが「社会」から切り離されることなどありえない。またスカルノ時代には大統領官邸に幼稚園があつた。しかし、スハルトはそうは考えない。なぜか。それはスハルトが「国家の空間」、チェンダナの私邸を「家族の空間」と考えるからである。スカルノにはこういう区別はなかつた。スカルノは常に舞台の上であり、第二夫人ハルテイニのボゴール宮殿、第三夫人デウイのヤソウ宮殿は、大統領官邸（独立宮殿）と同様、「公的」空間であつた。しかし、スハルトはこの二つの空間を区別し、使い分ける。大統領スハルトは「国家第一の公僕」として、大統領官邸でその職務を遂行する。そこではスハルトは一国家機関にすぎない。これに対し、チェンダナの私邸には親父スハルトとその家族が棲む。そこではスハルトは良き夫、良き父、良き親分として「一族」の面倒をみる。新秩序の二つの運転原理、官僚国家の論理と家族主義の慣行は、それぞれこの二つの空間に対応する。

2 国民的合意と国際的合意

では新秩序はいかにして成立したのか。新秩序が二つの手品、「治安秩序回復作戦（二五〇万の大規模殺人

共産党勢力の物理的解体）」と「大統領権限委譲（ニクトラタ）」によつて成立したことは、すでに述べた通りである。しかし、スハルト新秩序の誕生においては、これとならんで二つの「合意」が成立した。

そのひとつは、スハルトのいう「国民的合意」である。スハルトは「自伝」のなかで、これについて次のように語る。新秩序の基礎にはひとつの「国民的合意」がある。それは、パンチャシラ（建国五原則）と一九四五年憲法をインドネシアの国民生活の大柱とする、との合意である。この国民的合意は一九六六年、新秩序誕生のときに「自然発生的」に成立した。

スハルトはここで何を言つているのか。これを見るにはスハルト新秩序をスカルノの指導民主主義と比較すればよい。スカルノは革命はまだ終わっていないと言つて、「革命」の名において指導民主主義を正当化した。そこでは「革命」にもう具体的意味はなく、せいぜい国民意思を鍛え上げるというほどのことにすぎなかつた。しかし、それでも、指導民主主義がそうした精神の革命を目的とするからには、そのためのイデオロギ―と制度を必要とした。それが「ナサコム（NASAKOM）」と一九四五年憲法だつた。つまり、一九四五年憲法の枠内で、スカルノの指導下、ナシヨナリズム、イスラム、 Kommunismus の「創造的」緊張・競合によつて国民意識を国民意思に鍛え上げる、これがその論理だつた。

こうしてみれば、スハルト新秩序とスカルノの指導民主主義の違いは明らかだろう。スハルトは「ナサコム」と一九四五年憲法に代えて、パンチャシラと一九四五年憲法を体制の大柱とした。それは別言すれば、パンチャシラを政治の原則とし、それ以外は、イスラム主義、共産主義、自由民主主義その他いかなる主義も許さないということである。つまり、そこで暗黙の前提とされているのは、革命は終わ

つた、イデオロギーの時代は終焉した、ということである。これが「革命」に代えて「安定」と「開発」を体制の正当性シンボルとする新秩序の基本的論理である。

ただし、パンチャシラと一九四五年憲法についてのこの「国民的合意」は、スハルトの述べるように新秩序の誕生に際し「自然発生的」に成立したのではない。共産党勢力はスハルトの治安秩序回復作戦司令部の指揮下、陸軍と反共勢力によつてきわめてシステムティックに破壊された。四五十五〇万人の共産党員、支持者、他の人々が一九六五年一〇―一二月に殺され、五〇―六〇万人が逮捕された。また数万の人々は一九七〇年代末まで裁判なしでブル島に収容された。こうした徹底的な共産党弾圧は、共産党とその傘下団体の人々ばかりか、一般国民のあいだにも国家の治安秩序回復作戦司令部に対する抜き難い恐怖を植え付けた。一九六五年末から六六年はじめにかけて、特に多くの人々の殺された中、東部ジャワ、バリ、アチエなどの地域では、ほとんど毎日のように首のない死体が河に捨てられて下流へと流れていき、人々は一時、さかなを食べるのを止めてしまった。幹線道路沿いの村では逮捕された共産党員を運ぶトラックの音が夜ごとに聞こえ、村々では、あの木の下、この墓地の前、あの橋の袂といった殺人現場に、死の記憶がそれにまつわる恐怖とともに刻印された。つまり、インドネシアの人々は、国家の治安秩序回復作戦司令部の圧倒的な暴力の権力を、このときほとんど毎日のように目のあたりにし、そうした暴力に対する恐怖は、あの墓地、この橋の袂といった自然の情景に刻み込まれて記憶されたのである。こうして新秩序は死と暴力のうちに誕生した。新秩序の誕生に際し、パンチャシラと四五年憲法について「自然発生的」に国民的合意が成立したとすれば、それは死への恐怖からであった。

そしてこの恐怖が長い間、新秩序の安定を究極のところを支えることになった。つまり、少し比喩的に言えば、笑みを浮かべたスハルトの顔を見て、そこからふっと微笑みが消える瞬間を想像する、そしてその恐怖に震え上がる、そういう想像力の上に新秩序の安定性は成立していた。

もうひとつ、新秩序誕生に際して成立した「合意」は国際的合意であった。政治的安定と開発を国策の二大課題とする「反共」政権の成立は、「自由世界」から大いに歓迎された。新秩序体制の成立した一九六〇年代半ばといえば、ちょうど米国が急速にヴェトナムへの軍事介入を深めていた時期である。そうしたときに、北京・ジャカルタ枢軸を誹り、マレーシア対決政策を推進するスカルノの指導民主主義がひとりの米軍兵士の犠牲もなく崩壊し、反共軍事政権が成立したのである。米国がスカルノからスハルトへの移行を「自由世界」の勝利と歓迎したのも当然であろう。しかも日本政府は当時、米国の圧力の下ににだいに「応分の負担」を「自由世界」のために果たすようになっていた。こうして新秩序体制成立後まもなく、一九六七年、世界銀行を事務局として対インドネシア国際借款団 I G G I (Indonesian Governmental Group for Indonesia) が結成され、スハルト体制援助の国際的枠組みが作られた。

3 安定の政治

新秩序体制はこのような国内的、国際的合意の上に成立した。しかし、そうはいつても、一九六〇年代後半、七〇年代はじめ、スハルト政権がこれほど続くとはスハルト本人もふくめて誰も考えなかった

であろう。新秩序建設の長期プログラムなどなかったし、スハルトが一九六〇年代、七〇年代に、そういう長期の観点から体制の再編を考えたとも思われぬ。またこの頃にはスハルトと同世代、四五年世代の実力者が、政府にも軍にもずいぶんいた。たとえば、新秩序体制誕生時、スハルトを支持してその同盟者となった人々には、マラデン・パンガベアン(陸軍副司令官、一九六六年当時)、ウマル・ウイラハ、デイクスマ(陸軍戦略予備軍司令官)、バスキ・ラフマツト(内務大臣)、アミール・マフムツド(内務次官)、モハマツド・ユスフ(工業大臣)、イブヌ・ストウオ(石油公社アルタミナ総務)などがいた。デイポヌゴロ師団時代からの部下でスハルトの個人補佐官を務めていた将校には、アリ・ムルトボ、スジヨノ・フマルダニ、ヨガ・スガマなどがいた。またスハルトの部下でも同盟者でもないけれど、スカルノ派将校が外されたあと上がつてきた将校として、西ジャワ、シリワンギ師団のダルスノ、ケマル・イドリス、サルウォ・エデイ、中ジャワ、デイポヌゴロ師団のスパルジョ・ルスタム、スロノ・レクソデイムジヨ、ウイドド、東ジャワ、ブラウイジャヤ師団のスミトロなどがいた。この意味で、少なくとも一九八〇年代はじめまで、スハルトには「毎日がサバイバル」だった。ではスハルトはいかにして彼らとの「生存競争」に勝ち、かくも長期にわたって政権を維持することができたのか。そもそも彼はいかにして新秩序を作り上げたのか。

国 軍

国軍から検討しよう。スハルトは一九六五年一〇月一六日、陸軍司令官に就任して陸軍司令部を掌握

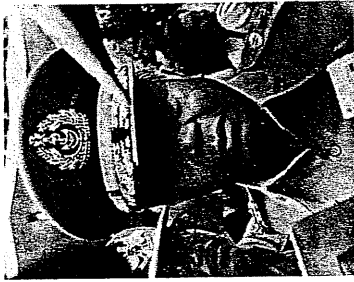
これを基盤に政権を掌握した。したがって、国軍の掌握はスハルトにとって政権維持の最大の要諦であった。では、彼はいかにして国軍を掌握したか。

一九六五年当時、国軍総兵力は五〇万、うち陸軍三〇万、海、空軍各四万、警察軍二二万であった。一九六五年一〇月、陸軍司令官に就任したといっても、スハルトが確実に掌握したのは陸軍参謀本部だけであり、地方ではアジェ西ジャワ地域軍管区司令官シリワンギ師団長、スルヨスベン(中部ジャワ地域軍管区司令官)デイポヌゴロ師団長など、スカルノ派将校がなお抜き難い地位を占めていた。またスカルノが海、空、警察軍を陸軍の対抗勢力として育成したこともあって、海、空、警察軍ではスハルトの国軍掌握に大きな抵抗があった。スハルトは軍内のこうした反スハルト勢力を分断しつつ、ひとつひとつ時間をかけて潰していった。空軍では「スパースマイル」の直後、一九六六年三十四月に粛清が行われ、オマル・ダニ空軍司令官以下、三〇〇人以上の空軍将校が逮捕された。またこの頃、チャクラピラワ



ヨガ・スガマ

大統領親衛隊も解散された。ついで一九六七年はじめまでに陸軍地域軍管区司令官全員の人事異動が実施され、また九月三日運動の拠点であった中部ジャワ、デイポヌゴロ師団では将兵の二〇%、約二〇〇〇名の逮捕、粛清が行われた。さらに警察軍の粛清は一九六七年、海軍の粛清はかつて西イリアン解放マンダラ作戦時代のスハルトの同僚、スドモ海軍提督の指揮下、一九六九年に入つてやと実施された。



スドモ

一九六九年の国軍機構改革は、そのあと実施された。そのポイントは、陸、海、空、警察軍を国防大臣兼国軍司令官、国軍副司令官兼治安秩序回復作戦司令部司令官の指揮下に統合することにあつた。またこれと並んで、地方では、方面軍司令部の下に陸、海、空三軍部隊の指揮権が集中された。スカルノ時代には、陸、海、空、警察軍の四軍は、軍政、軍令上、それぞれ独立の単位を構成し、スカルノは海、空、警察軍を陸軍と競わせることによつ

て国軍の「分割支配」を行つた。これに対し、一九六九年の機構改革では各軍司令官のポストが廃止されて参謀長に格下げとなり、国軍の指揮権は挙げて国軍司令官に集中された。こうして構造的に陸軍の海、空、警察軍に対する優位が確立された。

では誰が国軍を指揮したのか。スハルトの人事政策は、基本的には機構の論理に適つたものだった。つまり、国軍は機構機械であり、将校はそのパーツである、こういう思想の下に定期的に人事異動が行われ、陸軍地域軍管区司令官、方面軍司令官、戦略予備軍司令官、特殊部隊司令官などは、平均二年の任期で次々と交代していった。定期の人事異動が国軍機構のリズムとなり、将校は軍の要職を務めては、州知事、局長、次官、大使、大臣などに転出していった。これが基本ルールであつた。スハルトはこれに例外人事を組み合わせた。そこで登用されたのはスハルトの同盟者、部下であつた。スハルトは、こうした将校の中から、ごく少数の将校、それもジャワ人でない、イスラム教徒でない、陸軍でない

いた理由で大統領の地位を脅かす恐れのない将校を、きわめて長期にしばしば兼務の形で国軍の最重要ポストに登用した。たとえば、スハルトは、国軍司令官兼国防大臣にマラデン・パンガベアン(在任一九七三—七八)、モハマッド・ユスフ(一九七八—八三)を任命した。パンガベアンは北スマトラ出身のキリスト教徒のバタック人、モハマッド・ユスフは長く工業大臣として軍務を離れていた南スラウエシ出身のプギス人であつた。また国軍副司令官兼治安秩序回復作戦司令部司令官にはパンガベアン(一九六九—七三)、スミトロ(一九七三—七四)が任命され、一九七四年の「反日暴動」事件によつてスミトロが失脚すると、スハルト自ら治安秩序回復作戦司令部司令官のポストを掌握、このとき新たに設けられた参謀長



マラデン・パンガベアン

ポストにキリスト教徒のスドモ海軍提督が任命され、やがて一九七八—八三年にはスドモが国軍副司令官兼治安秩序回復作戦司令部司令官に就任した。また情報機関では、印欧混血のキリスト教徒、ベニー・ムルダニが、一九七四—八三年、国軍司令部情報参謀を務め、やがて国軍戦略情報センター長官(一九七七八—八三)、情報調整庁副長官(一九七八—八三)を兼務、さらに一九八三—八八年には国軍司令官兼治安秩序回復司令部司令官兼国軍戦略情報庁長官に就任した。これらの将校の任期は平均二年の任期と比較して異常な長さである。スハルトは機構改革とこうした人事の絶妙の組み合わせによつて国軍を掌握した。

内務行政機構

国軍機構が安定の政治、第一の柱とすれば、その第二の柱は内務省であった。新秩序体制下、最初の内務大臣に就任したのはバスキ・ラフマツト(一九六六―六九)、ついで彼の死後、アミール・マフムツドが一四年間、一九八三年まで内務大臣を務めた。内務省における共産党、スカルノ派官僚の粛清、陸軍将校の出向(次官、局長、州知事、県知事、市長などへの任命)による内務行政機構の梃子入れは、バスキ・ラフマツト時代に実施された。たとえば、州知事では、一九六六年当時、州知事二四名中、軍人二名であったのが、一九六八年には一七名、一九七一年には二六名中、二二名が軍人となった。ついで一九七〇年代はじめ、アミール・マフムツド内相時代に公務員共済組合が組織され、すべての内務省官吏は公務員共済組合参加、大政翼賛会ゴルカル参加を義務付けられた。こうして公務員でありながら政党の党員である者は「一元的忠誠モノ・ロイヤリティス」の名の下に、政党を脱退するか、公務員を辞職するかを選択を強制され、これによつて内務行政機構からの政党勢力の排除が実現された。

また内務省の地方行政機構(州・県・郡・村)と並行して「領域管理」を任務とする陸軍地域軍管区の機構が整備・拡充され、この両者を車の両輪として内務行政・治安維持・地方政治の監督を行う体制がつけられた。さらに一九六六年の陸軍セミナーで中道路線が陸軍の二重機能ドクトリンとして正式採用され、国軍の政治関与に理論的根拠を与えた。こうして陸軍と陸軍から内務省に出向した将校が、人的にも機構的にも治安維持、内務行政の屋台骨となった。こうした事情は情報省、外務省、農業省、公共事業省などの官庁でも同じであり、軍人が大臣、次官、局長ポストを占めてこれら官庁の指揮・監督を行

うようになった。たとえば、一九七〇年当時、大臣一七名中、六名、次官一七名中、七名、局長六二名中、二五名は軍人であった。また外務省では、一九七七年当時、大使の四〇％は軍人であった。

ゴルカルと総選挙

こうして機構の支配のメカニズムが整備された。しかし、機構はそれ自体としては正当性をもたない。そうした機構の支配が国民的正当性をもつためには、国民統治が国民自治のフィクションで裏書きされなければならない。そのために総選挙が必要とされた。総選挙の目的は、国民の意思を問うことではなく「成功」させることにあつた。では「成功」とはどういう意味か。もちろん、新秩序体制の翼賛機関、ゴルカル(機能グループ)の勝利である。こうして公務員は五年に一度の「民主主義の祭典」においてゴルカルへの投票を義務付けられ、国軍、内務省はゴルカルへの票の動員に全力を挙げ、ゴルカルは総選挙のたびに七〇％前後の票を得て議会をコントロールした。こうしてゴルカルは、新秩序体制を支える第三の柱となった。

そしてその一方、かつてスカルノ時代、行政機構に割拠して資金調達、党員の就職の世話、利益誘導などを行っていた政党は、国家機構へのアクセスを失つて凋落の途を辿つた。この打撃をもつとも深刻に受けたのがスカルノ主義マルハニスラムを信奉する国民党であり、またマシユミ党の系譜を引くインドネシア・ムスリミン党であつた。たとえば、一九七一年七月の総選挙では、ゴルカルが得票率六三％、二二六議席を得て勝利を収め、その一方、国民党の得票率は六・九％(一九五五年選挙では二・三％)、ムス

リミン党の得票率は五・四％（一九五五年選挙におけるマシユミの得票率は二〇・九％）、イスラム寄宿学校という国家とは独立の社会的支持基盤をもつ保守的イスラム政党、ナフダトゥール・ウラマーだけが得票率一八・四％で往時の勢力を維持した。

特別工作班

このように「安定」の政治は、国軍、内務省機構、ゴルカルを三本の柱に実現された。しかし、スハルトにとっては戦争も政治も同じである。戦争に秘密戦があるように、スハルトは新秩序の安定の政治にも秘密戦を持ち込んだ。これを担当したのが、大統領個人補佐官アリ・ムルトボの特別工作班であった。特別工作班は、一九六〇年代はじめ、スハルトの西イリアン解放マンガラ作戦司令官時代に設立された特務機関であり、「マレーシア対決」時代、マレーシア政府と陸軍司令部、陸軍戦略予備軍司令部との秘密チャンネルを開いて、マラッカ海峡を舞台に手広く「情報収集」と密輸を行った。

これが新秩序成立後、スハルトの「私的」情報機関として政治工作を担当、マレーシア対決政策の終結、ゴルカルの育成、国民党、ムスリミン党人事、財政への介入、政党合同（一九七三）、メッカ巡礼、イスラム寄宿学校（サントレン）補助によるナフダトゥール・ウラマー系宗教教師の切り崩し、国軍将校への資金援助など、スハルトの意を体して「汚れ仕事」を一手に引き受けた。その本部は一九七〇年代になってからはジャカルタの中央、タナ・アバンの戦略国際問題研究所におかれ、アリ・ムルトボ、スジヨノ・フマルダニをトップに、旧カトリック党の華人政治家ハリ・チャン・シラライ、学生行動戦

線の元活動家ユスフ・ワナンテイ（リン・ビヤン・キ）、ソファイアン・ワナンテイ（リン・ビヤン・クン）など、カトリック教徒の華人がその中心的メンバーとなった。またその資金はウイリアム・スルヤジャヤのアストラ・グループ、リム・シユウ・リヨンのサリム・グループなど、華僑・華人財閥から調達されたという。

新秩序体制下、特別工作班の手がけた最大の秘密戦は東ティモール併合作戦であった。東ティモールは本来ポルトガルの植民地だった。ポルトガルは東ティモールを支配し、ここに本国から政治犯を追放し、また秘密警察によつてその支配に対するいかなる抵抗も断乎として弾圧した以外、東ティモールの経済社会開発にまったく何もしなかった。一九七四年当時、東ティモールの一人当り国民所得は四〇ドル、輸出総額三五〇万ドル、植民地政庁予算五五〇万ドルにすぎなかった。ところが一九七四年四月、ポルトガルで革命がおり、新政府は遅まきながら植民地帝国の清算に乗り出した。東ティモールではこれに呼応して三つの政治勢力が登場した。第一は穏健派のティモール民主連合（UDT）で、数年の準備期間をおいた上での東ティモール独立を訴えた。第二は独立東ティモール革命戦線（フレティリン）で、即時独立を訴えた。最近、東ティモールのカトリック教会指導者ペロ司教とともにノーベル平和賞を授与されたラモス・ホルタは、その指導者の一人である。そして第三は、インドネシアとの統合を訴えるティモール民主人民協会（アボタテイ）であった。スハルトは東ティモールの政治不安がインドネシアに波及することを憂慮し、東ティモールのインドネシアへの統合によつてこの問題を片付けようとした。しかし、東ティモールはポルトガルの植民地である。インドネシアが公然と東ティモールの内政に介入

するわけにはいかない。こうしてアリ・ムルトポ指揮下の特別工作班がこの問題を手がけることになり、これが「コモド作戦」と呼ばれた。

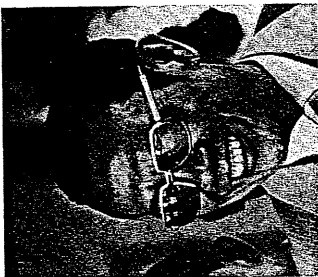
しかし、これはうまくいかなかった。ポルトガル政府は、一九七五年はじめ、一九七六年一〇月総選挙、一九七八年一〇月主権委譲のスケジュールを決定し、これによつてポルトガル政府に対するアリ・ムルトポの秘密外交工作は失敗に帰した。一方、東ティモールではこの間、ティモール民主連合、フレテイリンの対立激化から内戦状態となり、この内戦に勝利したフレテイリンが一九七五年十一月二十八日、東ティモール民主共和国の樹立を宣言、特別工作班の支援するティモール民主連合、アボデティはこれに対抗して翌一月二十九日、東ティモールのインドネシアへの統合を宣言した。

特別工作班のコモド作戦は、こうして失敗に終わった。このあとインドネシア政府は、一二月上旬、東ティモールの武力制圧に乗り出した。これが「スロヤ運作戦」であった。スロヤ作戦は、かつてのインドのゴア併合のように、迅速かつきれいに実施されるはずであった。しかし、そうはならなかった。インドネシア軍部隊は、フレテイリンのゲリラがプロフェッショナルに見えるほど不様な戦い振りを見せた。陸軍戦略予備軍所属のエリート部隊、第一八空挺旅団は、たとえば、フレテイリン部隊の真ん中に降下して多くの犠牲者をだし、そのあと今度はインドネシア海兵隊の砲撃を受けた。こうしてインドネシア軍部隊が東ティモールをともかくも軍事的に制圧したのは一九七八年末、フレテイリンの最高指導者ニコラウ・ロバトを射殺した頃のことであり、一九七〇年代後半、戦争とそれにとまなう社会経済的混乱、飢餓、疫病によつて、人口六五万の東ティモールでおよそ一〇一五万の人々が死亡した。そ

してそれにもかかわらず、この問題はいかなる角度から見てもまだ片付いていない。フレテイリンのゲリラは少数とはいえなお東ティモールで活動を続けており、また一九九一年のデイリ事件に如実に示されたように東ティモール独立運動はインドネシア支配下に生まれ育った若い東ティモール人のなかでますます多くの支持者を得るようになっていく。

対立の構図

こうしてみれば、国軍司令部と特別工作班、とくに定期的な人事異動のリズムによつて順調に昇進してきた陸軍主流の野戦将校と大統領の意を体して「汚れ仕事」を引き受ける大統領側近将校のあいだに緊張・対立があつても、ごくあたりまえのことだろう。国軍司令部は新秩序における機構の統治を代表し、特別工作班は親父の支配を体現した。それはスハルト新秩序を貫く二つの支配のメカニズム、大統領官



アリ・ムルトポ

邸を中心とするフォーマルな権力とチエンダナの私邸を中心とするインフォーマルなネットワークに対応するものだった。

スハルトはこの両方をうまく使い分けた。一九七〇年代、スハルトの政治指導のスタイルを描写するのにKISSというこぼれがあった。これは、それぞれ別々に官邸に行くKe Istana Sendiri Sendiriの略で、パンガベアン、スドモ、アミール・マフムッド、アリ・ムルトポ、スジヨノ・フマルダニ、ヨガ・スガマ、スミトロ、



スミトロ

スロノ・レクソデムシヨなどの実力者が、それぞれ、スハルトからもっとも重用されているのは自分だと信じて、互いに牽制し、対立するありさまを擲擻したものである。国軍司令部と特別工作班の対立は、しばしば、そういう権力エリートの暗闘における亀裂線となった。

その一例が一九七四年一月の「反日暴動」事件であった。一九六〇年代末、一九七〇年代はじめ、日本企業のインドネシア進出にともなうて、日本企業と大統領補佐官スジヨノ・フマルダニ、インドネシア石油公社アルタミタの総裁イヌ・ストウオなどの政治家、華僑実業家のあいだに同盟が成立し、これに対する学生、知識人、ブリアミ（現地人実業家の批判から、田中首相のインドネシア訪問に際してシ

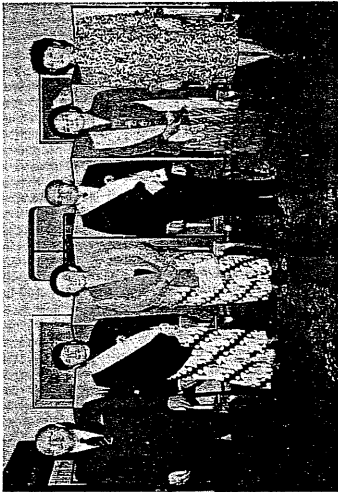
ヤカルタの中心部で暴動がおこった。これが「反日暴動」事件だった。この事件では、スミトロ（国軍副司令官兼治安秩序回復作戦司令部司令官）、ストボ・ユウオノ（情報調整庁長官）、サイデイマン（陸軍参謀次長）が「国軍司令部グループ」を代表し、アリ・ムルトボ、スジヨノ・フマルダニを中心とする戦略国際問題研究所グループと対立した。暴動は、学生の動員によって、この対立がエリート内部の暗闘に封じ込められなくなったためにおこった。

4 開発の政治

テクノクラット

では開発の政治はどのように行われたか。安定の政治を支えたのが国軍、内務省、ゴルカルであるとするならば、開発の政治を担当したのは「テクノクラット」であった。ここで「テクノクラット」と括弧付きで呼ぶのは、インドネシアではこのことばがほとんど固有名詞のように特定のごく少数の人々を意味するからである。では、それは誰のことか。これは人によって微妙に違う。しかし、ウイジヨヨ・ニチイサストロ、アリ・ワルダナ、モハマッド・サドリ、エミール・サリム、スプロト、この五人が「テクノクラット」の中核を構成することは疑いない。彼らはすべて、スカルノ時代にフォード財団の援助を受けて米国、カナダの大学で経済学を学んだエコノミストであり、新秩序成立当時、インドネシア大学経済学部で経済学を講じていた。またウイジヨヨ、アリ・ワルダナ、エミール・サリムはカリフォルニア大学バークレー校で博士号を取得し、このため「テクノクラット」は「バークレー・マフィア」とも呼ばれる。彼らは、一九六六年、新秩序体制成立まもなく、大統領個人スタッフとして政権に参加、一九七〇年代はじめまでに開発企画庁、財務省、商業省、鉱山・エネルギー省、投資委員会などの経済官庁の大臣、長官に就任、開発の政治を担当した。

では、なぜ彼らは新秩序体制において力をもつようになったのか。軍人とは違い、彼らは別に独自の



ワイジヨノ・ニティヨ・フママルダニ(左から2人目)ら
サストロ(右から3人目),

制度的権力基盤をもつわけではない。しかし、彼らは米国人エコノミストと同じ新古典派経済学の言語を話し、米国の大学、世界銀行、IMFを中心とする国際的なエコノミストのネットワークに属している。これが彼らの強みだった。新秩序成立当時、スハルトはおそらくIMFが何かも知らなかっただろう。そういう時代に彼らはインフレ克服、財政再建、経済安定化の処方箋をスハルトに売り込み、これを説得材料にIGGIの枠組みで米国、日本その他から外国援助を引き出した。彼らはまたハーヴァード国際開発研究所と毎年数百万ドルのコンサルタント契約を結び、ハーヴァード・エコノミストを「傭兵」に、財政金融政策、経済開発計画、税制整備、規制緩和その他、経済政策全般の立案、実施を担当した。

156

インドネシアの経済、国家財政は、テクノクラットの経済運営の下で、大きな変化を遂げた。それは大きく以下の二点にまとめることができる。

第一に、国家の財政的基盤がしだいに再建・整備された。スハルト政権の成立とともに対インドネシア国際借款団が結成され、この国際的な枠組みのなかで、インドネシア政府は一九六八年度から再び日本、米国、世界銀行、アジア開発銀行などの援助を受けるようになった。援助は、第一次石油危機以前

の一九六八年から七二年の時期には国家収入の一九・二七％、石油・ガス収入が大幅に増加した一九七三―八一年においても二二・二％を占めた。また二度の石油危機にともなう原油価格の高騰によって政府の石油・ガス収入が急増した。スハルト政権成立まもない一九六九年当時、政府の石油・ガス収入は四八三億ルピア、国家収入の一四％を占めるにすぎなかった。ところが第一次石油危機直後の一九七四年には石油・ガス収入は九七三億ルピア、国家収入の四九％、第二次石油危機直後の一九八〇年には六兆四三〇億ルピア、六一％に膨張した。

こうした巨額の石油・ガス収入がインドネシア経済を歪めた、とはよく指摘されることである。しかし、同時に、一九七〇年代から八〇年代はじめにかけて、スハルト政権がスカルノ時代には想像もできなかったような巨額の資金を国民から徴税することなく手に入れることができたということも忘れてはならない。一九七三年度を一〇〇とすれば、国家収入指数は七四年度で一・一五、七八年度で一・九一、八一年度には二・六五に拡大した。また石油・ガス収入、国営企業からの配当金、外国からの援助が国家収入に占める割合は、一九六八年度の三六％から七四年度の六四％、そして八一年度には七七％に達した。つまり、新秩序体制は、一九七〇年代、八〇年代はじめ、スカルノ時代と比べてはるかに大きな財政の自由度を享受したのであり、そうした資金を公共投資、政府補助金、その他の形でばらまくことにより、国民に直接、負担をかけることなくその支持を調達できたのである。

第二に、スハルト政権はテクノクラットの指導下、インドネシアの経済開発にも概ね成功した。米の自給は一九八四年に達成され、工業化も政府資金の投入、日本企業の民間直接投資などによって順調に

157 第5章 安定と開発の政治

進行した。一九六七年から九〇年まで、石油・ガス、金融部門を除く外国からの累積投資総額は三七三億ドル、日本からの累積投資額だけでその二五%、九三億ドルに達した。いろいろ批判はあつても、これがインドネシアの工業化に大きく貢献したことは明らかである。一九六六年当時、フィリピン、タイより小さかったインドネシアの製造業部門は一九八四年までに東南アジア最大となり、インドネシアの製造業部門アウトプットは東南アジア諸国連合アセアンのその約三〇%を占めるに至った。

158

家族主義の慣行

こうしてスハルト政権は、その成立以来、安定の達成、開発の実施に大きな成果を挙げ、これが長期安定政権実現の大きな理由となった。しかしそれとともに注目すべきことは、この時期に成立した分配のメカニズムである。では、どのような分配のメカニズムが成立したか。先に述べたように、インドネシアでは、陸軍戦略予備軍司令部、ジャカルタ特別区政府、大統領府といった国家機関がインフォーマルな「手数料」徴収、わいろ、「寄付」、財団の営利活動などによつて、財務省の関知せぬところで「私的」資金調達活動を手広くやっており、これが「家族主義」の論理によつて正当なものとして容認されている。しかし、ここでとくに注意すべきことは、そうした活動が単に腐敗の制度化、慣行化などではなく、きわめて意識的に政策として実施されているということである。

それはインドネシアが「近代化」すればやがてはなくなるといったものではない。仮にそうであれば、こうした慣行を「近代化」する機会はいくらにもあつた。たとえば一九七〇年代半ば、石油公社ブル

タミナの放漫経営により国家財政が深刻な危機に陥ったとき、それまでブルタミナ総裁イブヌ・ストウオの支配下にあつてテクノクラットにはまるで手の付けられなかつた「聖域」の国営企業が、ブルタミナをはじめ、財務省と所管官庁の實質的管理下に置かれ、これら国営企業の経営内容、そこからの配当収入がすべて財務省の一元的監督下に置かれる体制となつた。しかし、財団の資金調達活動には一切、手が付けられなかつた。もちろんそれには十分な理由があつた。それを理解するには、次のような事例を見ればよい。

スハルト政権は、一九六〇年代後半から七〇年代はじめにかけて、行政機構をその中央集権的・一元的コントロールの下に置くことに成功した。しかし、それにもかかわらず、行政機構は「小さくとも効率の良い」機構とはならなかつた。それどころか、上は大統領から下は末端の吏員に至るまで、公務員給与は一週間の生活費にも満たないほど低く抑えられ、「汚職・腐敗」がインドネシアの政治文化の一部といわれるようになった。しかし、少し考えればすぐわかるように、公務員定数制度を厳格に適用し、財政収入増加の一部を公務員給与の改善に回せば、こうした事態は避けられたはずである。だが、実際にはそういう政策とは違つた政策がとられた。国家支出に占める人件費の割合は、たとえば一九七五年から八八年にかけて、四二%から一五%へと大幅に低下した。そしてその一方で、同じ時期に、公務員数は一六七万人から三五三万人へと倍増した。公務員給与をきわめて低い水準に抑えて公務員数の増加を図る、これが政策であつた。

こういう体制の下では、公務員はもちろん給与だけではどうにもやつていけない。しかし、そうはい

つても公務員が個々にアルバイトに精を出し、本業を忘れては、行政機構がうまく作動するわけがないし、公務員の管理もできない。ではどうするか。政府機関が財務省の関知せぬところで「裏」資金の調達を行い、給与補填、生活補助をやるしかない。こうしたシステムを正当化したのが家族主義イデオロギーであった。このイデオロギーがインドネシアの政治にいかに関与しているか、これを見るには一九六五年九月三〇日事件においてウントゥン中佐が何と言つてその決起を正当化したか思い出せばよい。ウントゥンは、ヤニ陸軍司令官ほかの陸軍高級将校が将兵の利益を忘れて自分たちだけ贅沢な生活をしている、これはけしからん、と言つた。これは妙な話である。陸軍指導者が国民の軍隊という本旨を忘れて墮落し、私利私欲の追求に明け暮れている、これはけしからん、と言うのなら筋が通る。国軍は国民の軍隊だからである。しかし、ウントゥンが言つたのはそういうことではない。簡単に言えば、彼は、将官ばかりおいしい思いをするのはけしからん、将兵みんなで分けろと言つた。この精神、つまり自分だけで一人占めせず、部隊なら部隊、局なら局で揚がりをみんなでそれなりに分け合う、これが家族主義の要諦である。

したがって、新秩序体制下においては、この精神にもとづき、スハルトとその側近の実力者はもとより、各省庁においても省庁単位、局単位できわめてシステムティックに政治資金作り、裏給与の財源作りが行われるようになった。そして大統領、大臣、局長、地域軍管区司令官などにとっては、裏資金を調達して部下の面倒をみることに、これが「親父(パパ)」の「子分(アタック・ブア)」に対する当然の義務として期待されることになった。つまり、裏給与の補填をする、家族の誰かが病気になった、子供の学

費がある、割礼式でものいりだ、といったたびにその面倒をみる、これによつて官僚機構における上司と部下の関係がきわめてシステムティックに「親分」「子分」の人格的關係に転換された。

こうして行政機構と折衝するにはますます多くの文書が要求されるようになり、それらの文書のひとつひとつにサインが要求され、そしてそれらひとつひとつのサインをもらうのに金を支払わなければならないというシステムができあがった。また財団がいたるところに設立され、資金調達を行うようになった。国軍では、スタイルマン財団(陸軍司令部)、カルテイカ・エカ・パクシ財団(陸軍参謀本部)、シリワング財団(西ジャワ地域軍管区司令部)、ダルマ・プトラ財団(陸軍戦略予備軍司令部)などの財団がそれぞれ企



ベニ・ムルダニ(左)とリム・シエウ・リオン

業を設立して活発に事業活動を行った。たとえば、シリワング財団は西ジャワで映画館、精米所、銀行を経営し、ダルマ・プトラ財団は長距離バスの会社を経営した。また大統領も、ダルマイ社会奉仕財団(孤児援助)、スーパースマール財団(奨学金付与)、パンチャシラ・ムスリム奉仕財団(モスク建設、宗教教育助成)、カルヤ・バクティ奉公財団(ゴルカル助成)など、多くの財団によつて「親父」の義務を果たすようになった。もちろん、財団を使つて資金調達を行うといっても、大統領、大臣、軍人が直接、企業経営をやるのではない。それはほとんどの場合、リム・シエウ・リオン、ボブ・ハッサンといった政商チエコンに任せられた。また外国企業との合弁では、経営はもっぱら外国企

業に任された。さらにアルタミナ、食糧調達庁、国営スズ公社などからの「寄付」も重要な資金源となった。こういう資金調達のシステムを最初に考え出したのは、一九五〇年代後半、ディボヌゴロ師団長時代のスハルトであった。そして、これがいまスハルト時代に全面開花した。

162

対立の構図

こうしてみれば、テクノクラットのマクロ経済運営と財団、政商(チェコン)の利権ビジネス、資金調達活動があちこちで衝突したとしても、別に驚くにはあたらないだろう。石油・ガス収入のコントロールをめぐるテクノクラットとアルタミナ石油公社総裁イブヌ・ストウォ、戦略国際問題研究所「特別工班」のスジヨ・フマルタニの対立、規制緩和をめぐるテクノクラットとスハルトの政商の対立、こうした対立は新秩序に内在する官僚国家のフォーマルな論理と親父の支配の二重性に照応するものであった。

しかし、より重要なことは、こういう家族主義的分配のメカニズムが、本質的に不平等なメカニズムであるということである。こうしたシステムにおいては、何らかの形で「親父」にぶらさがることのできる人々とぶら下がりたくともそういう「親父」のいない人たちのあいだに決定的な格差が生じる。新秩序体制下、「中産階級」として上昇してきたのは何らかの科ネで「親父」にぶら下がることのできた人たちであり、したがって、こうした「中産階級」、エリートと、農民、職人、行商人、失業者などの「浮動する大衆(フロートイング・マス)」のあいだには非常に大きな貧富の格差が生じることになった。

そしてそれにもかかわらず、これが新秩序体制の安定を脅かさなかつたのは、「浮動する大衆」が国軍、警察、内務省の嚴重な監視下におかれ、また一九六五―六六年の死の恐怖の記憶から、ときにリゾート開発、工業団地開発などに関連した土地争議、小規模な労働争議はあつても、彼らが基本的に、政治的「動員解除」状態に置かれてきたからであつた。かつてアリ・ムルトポが「人民」をトラになぞらえたように、新秩序体制がもつとも警戒したのは「浮動する大衆」の政治化、つまり、彼らが街頭に出てきて、暴動、焼打ち、スト、デモなどをおこすことだつた。

5 大統領と親父

したがって、スハルトの安定と開発の政治は、二つの特徴をもつていた。そのひとつは、この政治が「人民」「大衆」の政治的「動員解除」を大前提とした、ということである。一九七四年一月の「反日暴動」事件が新秩序の危機となつたのは、この大前提が崩れそうになつたからであつた。もうひとつは、安定の政治と開発の政治、その双方における支配論理の二重性である。この二重性は、機構の支配と親父の支配、大統領官邸の「国家空間」とチェンダナの私邸の「家族空間」、フォーマルな権力とインフォーマルな権力、こういうさまざまの二重性に照応する。

こうしてみれば、一九八三年、「開発の父」の公式称号を議会から贈られ、「自伝」の冒頭でインドネシアが彼の治世下に米の自給を達成したと誇らしげに語るスハルト、巷ではジャカルタ弁で「バベ親

安定と開発の政治
第5章

163

父」と呼ばれ、また家庭では良き夫、良き父親といわれるスハルト、彼もまた、ちょうどスカルノが指導民主主義時代を象徴したように、彼の作り上げた新秩序体制を象徴しているといえよう。スハルトに演説の才は無用である。国民統治を行うには文書があれば十分であり、体制の正当性はパンチャシラと四五年憲法にもとづいて手続きの合法性手品を確保すれば、あとは安定と開発の実績がものをいう。そしてそれでも体制の正当性に疑義を懐きむ者があれば、一九六五年から六六年はじめにかけて何がおこったのか、思い出させればよい。

このことはもちろん、スハルトがまったく演説をしなかったということではない。スカルノは毎年、八月一七日に独立記念演説を行ったが、スハルトはその前日、恒例の国政演説を行い、その模様はラジオ、テレビで全国に実況中継される。しかし、この演説において、スハルトは、一時間余りにわたって演説原稿をただ単調に読み上げるだけである。スカルノが演説するとなるとみんなラジオにしがみつきの道路から人影が消えたとはよく言われることであるが、いまではスハルトの演説が始まるとみんなテレビのスイッチを切ってしまう。しかし、それにもかかわらず、スハルトの演説の単調な声、笑みを浮かべた顔、アイロンのよくきいたサフアリ・スーツなどは一九八〇年代はじめ頃までのスハルト体制を見事に象徴するものだった。

彼はスカルノのように「終身」大統領などにはならなかった。五年に一度の自由でも公正でもない総選挙によって選ばれた議員と国軍代表議員によって国民議会が編成され、この国民議会議員と大統領任命議員によって国民協議会が召集される。これが国権の最高機関である。スハルトはこの国権の最高機

関から信託を受けることで、五年に一度、大統領に選ばれる。すべては法に定められた型の通りに行われる。したがって、そうした国家構成法に照らしてみれば、大統領スハルトといえども、国家第一の公僕にすぎず、その意味では国家機構（＝機械）のパーツにすぎない。そしてこの機械が何によってその存在を意味付けられているかといえば、それは国民の安寧と福祉の増進を目的とした「安定」と「開発」によってである。こうしてスハルトも、ちょうどスカルノが全国遊説に飛び回ったように、スマトラ縦断ハイウェイの開通式、新精油所のオープニング、アサハンロ・イ合弁アルミ精錬所の完成式典、東インドネシアの製材所開所式、と飛び回る。

しかし、それはあくまでスハルトのひとつの顔である。スハルトには国家第一の公僕とならんでもうひとつの顔がある。それが「親父パパ」の顔である。新秩序体制初期、大統領個人スタッフの時代から、スハルト政権下における多くの重要な決定、とくにインフォーマルな「工作」「資金調達」に関わる決定は、彼と彼をめぐる少数の側近によって彼のチェンダナの私邸で行われた。チェンダナの私邸に出入りできることはスハルトのインナー・サークルのメンバーであるための最大の条件であり、そこではスハルトは「パツ・ハルト」「パパ」、側近は「マス・ジョノ」「マス・ルデイ」など「マス兄さん」をもって呼ばれる。彼と「オーム・リム」ほかのチェコン（政商）の相談が行われるのもやはり私邸である。中央でも地方でも、エリートならあいたに一人か二人入れれば、まず確実にスハルトの側近に到達できる。こうしたインフォーマルなネットワーク、インドネシア人のいう「コネクシ」のネットワークがフォーマルな機構に縦横に走っている。しかし、このネットワークはあくまでインフォーマルでなけ

ればならない。この二つが混線し、インフォーマルな論理がフォーマルな領域を浸食するようになると、型が崩れる。

スハルトは一九八〇年代はじめ、この二つの論理を周到に使い分け、国家第一の公僕として、親父として、揺るぎない地位を確立した。しかし、一九八〇年代半ば以降、スハルトとその新秩序に重要な変化が起るようになった。では何がおこったのか。それによってスハルト新秩序はどのような変貌を遂げつつあるのか。

略年表

年	
1901	倫理政策の開始 スカルノ誕生(6月6日)
1904	カルテイニ死亡
1908	ブデイ・ウトモ設立
1912	イスラム同盟設立 東インド党結成
1914	チヨクローアミノト, 中央イスラム同盟議長に就任
1919	東インド政府検察庁一般調査部(秘密警察)設立
1920	東インド共産主義者同盟(インドネシア共産党)設立
1921	スカルノ, バンドウン工科大学入学
1923	スハルト誕生(6月8日) スカルノ, インギット・ガルナシと結婚
1925	イスラム同盟分裂
1926	スカルノ, バンドウン一般研究会設立(11月) スカルノ, 「ナシヨナリズム, イスラム, マルクス主義」発表 共産党・人民同盟武装蜂起(西ジャワ, 11月)
1927	ポーフェン・ダイグール, タナ・メラに収容所設立 共産党・人民同盟武装蜂起(西スマトラ, 1月) インドネシア国民党設立(7月) インドネシア国民政治団体協議会設立(12月)
1929	スカルノ逮捕(12月)
1931	国民党解散, インドネシア党結成 スカルノ出獄(12月)
1932	スカルノ, インドネシア党議長に就任(7月)
1933	ハッタ帰国, インドネシア国民教育協議会議長に就任(8月)
1934	スカルノ逮捕(8月) スカルノ, エンデに流刑(1月) ハッタ, シャフリル流刑(8月)
1941	スカルノ, ベンクルに移管(2月)
1942	日本軍, スマトラ侵攻開始(2月) オランダ降伏, 東インドにおける日本軍政開始(3月) 今村・スカルノ会談(7月)
1943	義勇軍結成

スカルノとスハルト——偉大なるインドネシアをめざして
現代アジアの肖像 11

1997年1月20日 第1刷発行

著者 白石隆

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000

印刷・三秀舎 カバー・縮印刷 製本・三水舎

© Takashi Shiraishi 1997

ISBN4-00-004866-X

Printed in Japan

日本複写権センター委託出版物本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられます。本書からの複写は、日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得てください。